
悪役上等！ 武装戦闘国家ゼクトール

アズマダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪役上等！ 武装戦闘国家ゼクトール

【Z-コード】

Z0753Z

【作者名】

アズマダ

【あらすじ】

もしも、高校生が絶対君主制国家の国王になつたとしたら？
そして、国民における女の子率が、異様に高かつたとしたら？
さらに、国民の生と奪権が国王にあつたとしたら？
そのうえ、主人公を補佐するのが幼なじみの少女で、その子が暗躍しまくつたとしたら？
あまつさえ、その国が滅亡の危機に瀕していたとしたら？
その危機を救えるのは？
よーし、まじめにいってみよう！

1・ニホン

序・

白い指だ。

細くてしなやかな少女の手が、白い砂に埋もれかけた写真を拾い上げた。

端が焼けこげた大判の写真。

細くて華奢な少女の手が、白い埃を丁寧に払いのける。
どこかぎこちない笑顔で収まる、十一人の集合写真。

中央に映っているのは、夏の制服を着た少年と少女だった。

1・ニホン

「ちょっと桃矢！」

怒りにまかせた幼馴染みの声と共に、A4サイズの雑誌を入れた紙袋が、桃矢の後頭部に直撃した。

芦原桃矢は、言い返したい言葉を飲み込んで、頭を抱えうずくまる。おさまりの悪い毛が一本、指の間から飛び出して左右に揺れていた。

「デートしてた女の子に対して、何も言わずに先に帰るつてどうよ？ それでも健全な高校生？ 十七歳男子？」

雑誌を拾い上げ、砂埃を丁寧に払い落とした後、騎旗桃果は不平を口にした。

「デートって、……桃果ちゃん。学校の帰りに寄った本屋でフランカーの特集号を食い入るように立ち読みしてたのは誰ですか？ 口シア製新鋭戦闘機を穴が空くくらい眺めてるだけのデートなんて初めて聞いたよ」

アドレナリンが誘発した汗が、桃矢の額を濡らす。汗を拭う手が、意図的に長く伸ばした前髪をかき分ける。髪の隙間から大きなホク口が顔を出す。綺麗な五角を持つ星形の珍しいホク口だ。ホク口が空気に触れたことを察知した桃矢は、慌てて前髪を下ろす。

「お！ 桃矢の恥部を見るの久しぶりね！」

桃矢は、嫌そうな眼で桃果を見上げる。

夕方とはいって、まだまだ力を保つたままの太陽。その陽光を背にした桃果は、光の中にいた。

夏の制服がよく似合う桃果。スカートのプリーツを透かして、形よい足が見える。

桃果は無邪気に笑っていた。

何物にも代えがたい輝きの笑み。このかわいい笑顔を見たいがために、同年代の男共は身の程を超えた努力にいそしむのだ。

生まれたときからの付き合いを誇る桃矢でも、時々だまされたくなる太陽のような笑顔。

道行く十人が十人とも振り返るほど可愛いんだけど……中身を知つての桃矢は素直な反応をよこさなかつた。

「戦闘機の写真集だから痛かった？」

背中まで伸ばしたサラサラの黒髪を指でくい上げる桃果。

「まだ痛みの引かない頭頂部を片手で押さえている桃矢。

「写真は鉄の塊のを撮つたんだろうけど、媒体は紙だからね」

「じゃ、痛くないわね。さ、帰ろ帰ろ！」

話は済んだとばかりに、ズカズカと歩を進める桃果。

桃矢には、そのいい加減さに思い当たる節があった。

「桃果ちゃん。」
「両親さあ……」

「言わないで！」

先程までのおどけた空氣がない。桃果は、ぴしゃりと桃矢の言葉を封じた。

桃矢は肩をすくめてから歩き出す。桃果も、無かったことにして先を歩いている。

毎日の毎回の繰り返し。いつの間にか、いつもの終わりが始まっている。

角を曲がれば桃矢の家。向かいは桃果の家。
角を曲がれば……。

「あれ？」
「なによ？」

曲がったとたん、桃矢が立ち止まる。芦原家の前に止まった、黒塗りの大型車が一台。

車の周りには、ガツチリした体格かつ黒服の男達 ならぬ、グレーの制服が三人。

「軍服……のコスプレ？」

桃矢の頭の中をいろんなアニメ雑誌記事が、回り灯籠のようにゆっくり回転している。が、見覚えのないデザインだ。

灰色の男達の背後から、四つめの影が現れた。同じデザインの軍服を着ているが……。

線が細い。

桃矢と同じ年であろうと思われる、背筋を伸ばした美少女が、七分の構えで立つ。

後ろになでつけた短い金髪は絹のようになじく、アイスブルーの目が底抜けに冷たい。
どのような混血の結果か？ きめの細かい浅黒い肌が、彼女の人生を複雑にしていた。

「トーヤ・アシハラ様……ですね？」

「は、はい」

それを合図に、男の一人が車の後部ドアを開ける。と、同時にエンジンがかかる。

「これはまずい。大変まずい展開だ。桃矢の脳裏に「拉致」の一言が浮かぶ。

「初めまして。わたくしミウラ・ヴァイツと申します」

肩パット入りの制服とタイトミニが、凛々しくも美しい。

「事は急ぎます。トーヤ様、我らとご同行願います」

両脇を灰色の男達にガツチリつかまれた。万力で腕をはさまれた感覚。もがいてみるが微動だにしない。

「ちょっと、あなた達誰よ？ ここは法治国家日本よ！ 最近この近くで誘拐事件があつてね。この辺、警察のパトロールが頻繁なのがよー！」

桃矢と車の間に立ちふさがる桃果。こういう時に機転の利く、頭の回転が速い子だ。彼女を頼もしく思う時点で、男失格だなと思う桃矢。

厳つい男が、丸太のよつに太い腕を伸ばし、桃果をよつこりせと脇へ退かす。

ミウラと名乗る少女は、微笑みもしなかつた。

桃矢は、鏡で自分の顔を見たくなつた。我ながら情けない顔をしているだろうと思う。

「だめよ！ 桃矢はこれからあたしと百里へ、イーグル見に行くのよ！ 先約よ！」

「そんな約束してないつて！ 僕は軍事オタじやないから」

桃矢とミウラの両方から無視される桃果。だが、負けない。再び、前に回り込む。

「これを見なさい！ このひもを引き抜くと警報が鳴つて警察が大挙して押し寄せてくるわよ！ そくならないうちに桃矢を離しなさい！」

桃果が持つているのは白い携帯と、訳あつて表現できないが、世界一有名なビーグル犬のストラップ。引き抜いたところでブザーは鳴らない。お子様携帯であるわけでなし、もとよりそんな機能はついていない。

ミウラはまじまじと桃果を見つめている。

「さあ、どうするの あ！」

桃果の携帯は、手首のスナップを利かせたミウラの猫パンチではたき落とされた。

「ああっ、ちよつと！」

嫌な音を立てて落下した携帯を拾い上げよつと、慌ててしゃがみ込む桃果。

「ああああ、ちよつと… ちよつと…」

一方、宙ぶらりんになつた桃矢。抵抗虚しく、コンパクトに車の

中の人となる。

と、窓の外に母の姿を見た。

「お母さん！ 助けて！」

車の中から大声で叫ぶ桃矢。

偶然か神の思し召しか。うまい具合に母と視線が合った。

「行つてらつしゃい。体に氣をつけるのよ！」

笑顔で送り出す母。手を振つてゐる。

店の奥から、父が姿を現した。

「父さーん！ 助けてー！」

ワインクしながらサムズアップする父。キラリと光る白い歯がとてもダンディ。

「どうこつこ」と一つ？

桃矢のいつもの日常は、あっけなく幕を閉じたのだった。

有無を言わぬ空港へ。国際線の大型ジェットに乗ること十数時間。

さらに、一回り小さいジェット旅客機に乗り換えて数時間。もう一度乗り換えた三十人乗りのプロペラ機が水平飛行に移つた時、たまらず桃矢が口を開いた。

「あの！ 僕どうなつちゃうんでしょつか？」

対して、大きく目を見開くことで答えるミウラ。

「どうって……トーヤ様、なにがどうなのでしょうか？」
桃矢は理解した。話が噛み合ってないのを。

「何で僕が拉致されなきやならないんですか？」
ミウラは微かに口を開いて動かなくなつた。目の光も鈍くなつて
いる。

桃矢が待つこと十数秒。状況を判断しあえたのか、ミウラの瞳に
再び明かりが灯る。

「ひょっとしてトーヤ様、ご両親からは何も聞いておられないもので
しょうか？」

自分のことを「様」付けで呼んでもらつているところを鑑みるに、
可及的速やかな危機はなさそうだ。と、なると、桃矢にも、ある種
の感情が自然発生する。

ズバリ、その名は怒り。

「だから、何が何だか解らないから聞いてるんですつて！」

「アイヤウホイ！」

母国語であるうか？ 聞いたことのない単語を口走り、左手を額
にあてたミウラ。なにか重大な齟齬をきたしたらしい。

ミウラは居住まいを正した。

「トーヤ様。数々の『無礼お許し下さい』。改めて全てをお話しいた
します」

一旦言葉を句切り、ミウラは視線を前後左右に素早く走らせる。
その仕種につられ、桃矢もキヨロキヨロとあたりを見渡した。

いつの間にか、灰色の大男がいなくなつていて。その代わり、不
自然な人が増えていた。

アロハシャツを着た人の良さそうな老人が、紙コップに入ったコ

ーヒーをすすつている。新聞を広げる背の高い婦人。居眠りする老婆。難しい顔をして窓を睨んでいる中年女性。

人種はバラバラだが、ミウラの軍服を気にしている人は一人もない。

これはつ、全て同じ穴のムジナつ？

「我らが母國の名はゼクトール。ゼクトール王國と申します」「姿勢の良いミウラがさらに姿勢を正す。

桃矢は、初めてミウラを正面から見据えることになる。小さい顔。日本人離れした美しき風貌。……日本人ではないが。

威風堂々としたその態度、とても同年代には見えない。

桃矢はミウラの瞳の色、アイスブルーが、色に等しい温度をもつたように感じた。

「トーヤ様はゼクトールの次期国王なのです」

この間、きつちり三秒。

「はい？」

いまいち、よく聞き取れなかつた。

「トーヤ様は、ゼクトール民主主義國前国王ゼブダ・バルギトル・ゼクトール様の跡継ぎなのです」

「えーと、……いい病院紹介しましちゃうか？」

「言い直しましょう。前国王が身罷られた今、トーヤ様が次期国王に決ましたのです」

「なんですよーつ！」

前の席から身を乗り出して叫んだのは桃果であつた。

1・ニホン（後書き）

今回、そんなに深く考えていません(ｗ)
女の子も、百万人は出てきません(笑)
全40話程度の予定です。

2・ゼクトール

「な、なんで桃果ちゃんが？」

桃矢は自分の身の上話より、桃果が、今ここにいる事に強く疑問を感じている。

「るつさいわね！ そんなことよりあなた、ミウラー、続きを早く話しなさいよ！」

目を大きく見開いたまま、しばし動搖を隠せないミウラ。その間のミウラは年相応の顔をしていた。ついでに言つと、周囲の一般人らしき人々も中腰になっていた。

ミウラは、桃果の気迫に押されるようにして話を続ける。

「ゼクトールの前国王には、お子様がございませんでした。つまり、息を引き取られた時点で、王家の直系が絶えてしまったのです。傍流のお血筋で、王位継承にもつともふさわしい条件をそろえておいでなのがトーヤ様なのです」

桃矢の感覚は麻痺していた。理不尽な出来事に続いて、極度の緊張を持続させたためか、情報の入り口が狭くなっていたのだ。

桃果の手が伸びたのに気付かない。そつと伸びた桃果の小さい手が桃矢の額をさわる。そして、桃矢の伸びた前髪をかき上げた。

「これね？ この星形のウルトラビームね？」

「いや、あのね桃果ちゃん」

「こういう我に返りかたは嫌いだつた。

「それです。ゼクトール王家の血を濃くひく人々に、たまに現れる遺伝上の特徴です。星形のお印を持つ方が、最も初代に近いと言わっています」

桃矢の「デリカシー」など問題外の事らしい。

「でもさ、僕は日本人顔だよ。両親も日本人だし、両方のお爺さんお婆さんも日本人だよ」

桃矢の手を乱暴に払い、前髪を元に戻す桃矢。

「第一次世界大戦末期、我が祖国ゼクトールへ侵攻した日本軍が、両国親善のためと称し、王家の姫君、キリア・ウハウハ・ゼクトーラ様を日本へ連れ去られた。その姫様がトーヤ様の曾お婆さままでござります」

「さすがに三代前は聞いてないな。……つーか、そんな話が本当にあつたらマスコミが喜んで大騒ぎしてるよ！」

笑顔を浮かべようとしたが、頬が引きつっただけだった。

「その部隊が目的不明の秘匿部隊であったこと。部隊が撤退中に、連合国軍の攻撃で壊滅的打撃を受けたこと。生き残りが姫様を託した輸送部隊に、トーヤ様の曾お爺さまがおられたこと。そのあと、生き残りの方々が、姫君を落ち延びさせるため特攻攻撃を掛け、全滅したこと。等々、いろんな事が重なり、表に出ない史実として闇に埋もれていたのです」

一般人を装う乗客達は、普通の乗客に戻っていた。ただ皆、一様に沈痛な面持ちであった。その事が、マシーンになりきれない彼らの国民性を物語っているのかもしれない。

「隔世遺伝つてヤツ？」

桃矢の問いに、うなずくミウラ。ミウラの瞳は力強い光に満ちていた。しかし、今までとは違った光。強い忠誠心に満ちあふれた従順な家臣のもの。

「ふつ！ 仕方ないわね」

まったく、桃果は空気を読まない子だ。桃矢はいらだちを覚える。恐れ以外の感情が桃矢に現れた。それは周りを見つめる余裕ができた証拠なのだが、彼は気付かない。

「わたしが桃矢王朝の為に一肌脱いでやるうじやないの。で、どこよ？ ゼクトールとかいう国の場所は？」

腕を組んで鼻から荒い息を吐く桃果。口をあんぐりと開ける桃矢。

桃果はこの状況を受け入れている？ なにゆえ？

「えーと、桃果様でしたわね？」

元の冷たいアイスブルーに戻ったミウラ。警戒心を露わにした言葉は冷氣を帶びている。

「桃果様は、早々にお帰り願います。」近所の幼馴染みというだけでは、おつきあい願えません。第一、『』両親が心配なされているでしょう。お電話でもなさいますか？」

『』ひとつもしないミウラ。『』つい携帯を桃果に渡す。恐らく軍用と思われる。

「大丈夫！ そんな必要ないわ！」

腕を組み、傲然と笑っている桃果。頭が天井へ付きそうになつてみると、見ると、座席の上に立つていてるのだらう。

「だ、だめです、それでは理由になりませんー。』両親と、よく話しあつてくださいー」

眉間に皺を寄せ、困った顔をするミウラ。何にこだわつていてるのか。

「いいのよ、あんな連中ー！」

「家族は大事にしなければなりませんー！」

桃果の言葉にミウラが即反応した。反応の早さに桃矢が驚いた。
ミウラの絡みようは、道徳心だけから来るものとは思えない。酷く真剣な眼差しだ。

「あたしに家族はないの！ あたしの両親は離婚したの！」
ミウラの動きが止まった。

新聞を読んでる人も、コーヒーをすすってる人も、動作を止めて
いる。

機内の空気が堅くなつた。

「タベ離婚届に判子を押したわ。あたしが立会人よ！」
「やつぱりだめだつたの？」

家は隣同士、高校は一緒。桃矢は、ある程度の成り行きを知つて
いる。お人好しの桃矢は、自分の身に降りかかる不幸を脇に置き、
桃果の今後を心配している。

「お父さんもお母さんも、家や家族を守るつもりなんて、最初から
これっぽちも無かつたつて事よね。やつと家族が終わつたつて。そ
んなこと言つてた」

いつものような、明るい笑顔を見せている桃果。

桃矢の目には無理をしている様に映る。こんな場合、どう声をか
けてやればいいのか？

「親御さんは子供のことを、あなたを必ず愛しているはずです！
だから、諦めずにもう一度お話しぐべきです！」

言葉を紡いだのはミウラだった。

クールビューティは眉を寄せていた。なにゆえか、ミウラは桃果
の家庭を心配していた。

「親を好きにさせてやるのも子供の愛情よ！」

指を一本立て、チチチと左右に振る桃果。

「しかし 」

家族にこだわるミウラを桃果が遮る。

「あたしは、絶対に家族を守りきる大人になるわ！ 死ぬまで家族を終わりにしない！」

太平洋高気圧のような凄みのある笑み。桃矢の目には、それが痛々しく映つた。

「ところでミウラさん？」

桃果は座席から、いきおいよく飛び降りた。

「あたしは騎旗桃果。彼は芦原桃矢。一人とも名前に桃が付いている。なぜだかわかる？」

桃果は話の方向を意図的に反らしている。ミウラのアイスブルーに興味の色が浮かんだ。

なぜだか？ と言われても説明に困る。大それた理由などないからだ。じつは、先に生まれた桃果の「桃」の字を氣に入つた桃矢の母が、こじつけて付けた名前だったのだ。

「我が騎旗家は明治の御維新からこつち、ずっと芦原家嫡男の護衛を務める家柄なの！」

いや、いやいやいや。芦原家が先祖伝来住まいしていた土地に二十年前、騎旗家が越してきたのだし、次男の桃矢は嫡男じゃない。兄が一人いるし。

そんな関係は成立しない。

「十七年前に星形のホクロを額にもつて生まれた男の子。偶然同じ年に生まれたあたしと桃矢は等しく育ち、等しく教育を受けてきた。それはね、桃矢の考え方を理解し、力添えをする為よ。いわば、あ

なた達とあたしは同志なのよー。」

二人は同じ年だし、同じ高校に通つて同じ教科書を持つてゐる。桃果の言葉に嘘はない。嘘は言つてないけど、本当のことも言つてないパターン。

さすがに桃果を見てられなくなつた桃矢。ミウラの顔色をつかがつた。

彼女は田を見開き聞き入つていた。意外と素直な少女である。

いやいやいや、腐つても軍人……腐るほども年取つてなさそうだが……、そんなフェイク、ミウラが信じるわけないだろ？

「どうかご協力お願ひします」

頭を下げるミウラ。白く固まる桃矢。

「任せなさい！」

ますます鼻息が荒くなる桃果。そこそこに豊かな胸を反らしているのでだった。

2・ゼクール（後書き）

さてさて、話が走り出しました。

ついでにボチッと評価ボタンを押してください。

3・「バルトの海

「ところで、ゼクトールって王制を敷いているところから見て絶対君主主義国家？ ねえ、軍事国家でしょ？ 戦闘機は何を採用してるので？ ミラージュ？ それともF？」

たたみ掛けた桃果に押され氣味のミウラ。

「えーと、ミグ」

「あーそっち系ね、はいはい！ 小さい国特有ね。いいわよいわよ、あたし向きよー！」

桃矢は、あきらめ顔で飛行機の天井を見上げた。

やれやれ、どこでも桃果ちゃんは桃果ちゃんなわけで……、でも桃果ちゃんのおかげで気持ちが軽くなつた。

冷静に考えると桃矢の立場は低くない。余裕じゃん！

そこまで考えが及ぶと、俄然、桃矢の中に怒りが込み上りってきた。

「僕は国王を引き受けるなんて言つてないよ！ 第一、僕の親が黙つてない！ 今頃警察沙汰になつてるよ。へたすりや国際問題だ！」
大声を出す桃矢。対して、らしくない顔をするミウラ。彼女に対するスマートなイメージがどんどん崩れしていく。……これ見よがしな桃果の舌打ちは、聞かないフリをする。

「ご両親からは許可をいただいてますが？ 当然、理由はご存じでしたし」

「あれ？」

「ちょっと、…………」いつ……期待していた答えと違う。

「僕に電話貸して！」

母から帰ってきた答えはこうだ。

『あれ、言つてなかつたつけ？ でも、ミウラさんつていい人でしょ？ かわいいし』

「父さんに代わつて！」

『父さんだ。思つたより早かつたけど、まあいい。男はいつか旅立つものと相場は決まつていて。盆と正月には帰つてこによ』

桃矢は電話を静かに置いた。世にも情けない顔をして振り返る。

「もちろん日本政府にも、外交的に話がついています」

ミウラがどどめを刺した。

もうだめだ！ 膝を抱えて、床につづくまる桃矢。

「可哀想に」

優しく桃矢の頭を撫でる桃果。目にいっぱいの涙を浮かべて桃果を見上げる桃矢。

……桃果は嬉しそうに笑つていた。

「トーヤ様、どうかご安心を。トーヤ様が思つておられるよつな責務を我らは求めておりません」

初めて柔らかい笑みを浮かべるミウラ。

「は？ はあ？」

「ええーつ！」

腑抜けた声を出す桃矢と、あからさまに残念そつな声を上げる桃果。

「いわば素人のトーヤ様に、今までの生活を捨てて王になれと申し上げるのも、それは無理な話。我らとて重々承知しております。これはあくまで形式的なものです」

まずは桃矢を安心させるため、結果を先に言つ//ウラ。

「ゼクトールは今、問題を抱え込んでおります。といつても、トーヤ様がお気にかけられる類の問題ではありません。政治形態に王制を探るゼクトールといたしましては、政府首脳部が案件を解決するにあたり、仮初めとはいえ国王が必要なのです」

ミウラは、一息ついて桃矢達の様子を見た。ツバメの雛のよう口を開けている桃矢と桃果。上々な結果である。

「トーヤ様におかれましては、ゼクトール政府の機能回復のため、いくつかの案件の承認と権限委譲に同意していただくだけで結構です。それもたつた一日間。ご迷惑はおかげいたしません。合間に、郷土料理や名所観光などでお楽しみいただければよろしいかと」

固い笑みをきのりなく浮かべるミウラ。

「いわば、機内移動時間無視のゼクトール国王体験一泊一日の旅を『満喫！』つて解釈で良いのかしら？」

ミウラの説明に納得いったのか、桃果が合いの手を入れる。

「はい、正にその通りでございます！」

今度こそ、心底につこりと微笑むミウラ。年相応の笑顔。とても可愛かった。

しかし。

「冗談じゃない！ そんな一方的で理不尽なナニに付き合ひほど僕は暇じやなキユー！」

「キユ？」

細い眉を寄せせるミウラ。

そこには、後ろから桃矢の首に腕を絡ませた桃果がいた。立つたままのネックブリーカー。容赦ない事で有名な技だ。

「で、ゼクトールって何処にあるの？ 教えてちょうだい」

桃矢のことはさておき、氣さくに話しかける桃果。

ミウラは桃矢と桃果の眼前で紙を広げた。それは世界地図だった。落ち込んでいても始まらない。桃矢は、逃げ出すための情報収集のつもりで覗き込む。

「ここです」

ミウラが指示する場所は、赤道からちょっとだけ離れた海の真ん中にある、針で突いた傷のような小さい島。

「えつ！ ええーつ！ 島国？」

頭を抱えたのは桃矢。ありとあらゆる大陸や半島や島から離れるだけ離れている。まさに絶海の孤島。陸、海、空路での単独脱出は不可能。

「拡大図はこいつ」

ミウラがもう一枚の地図を広げる。

ほぼ円形の島から西に一本、岬が張り出している。一言で表現するならフライパン。

それと柄の延長線上に小さな島が一つ。

「こいつ、これは……屋久島より小さい？」

桃果も会話に窮し、眉をひそめていた。

「でもさ、なんでこんなへんぴな……もとい。ちいさな国の姫様を

旧日本軍が？」

桃矢、当然の疑問である。

「真の目的は計りかねますが、我が国で戦局に係わる何かを発見したらしく あつ！ 見えてきました。あれがゼクトールです！」

ミウラが、顔を輝かせながら窓の外を指さす。桃矢は、指された景色を見るついでにミウラの表情を盗み見た。故郷を見るミウラ。子供っぽい顔をしている。

「うわっ、ちょーすーっ！ ヤバイくらい綺麗！」

桃果の歓声に、桃矢ものぞき込む。

コバルトブルーの中にエメラルドをちりばめた海。そこに浮かぶ
緑の島。

陽の中の陽、光の景色が広がっている。

「美しい！」

あまりにも現実離れした美しい景色がどこまでも続いていた。

結局、ゼクトール本国に降り立つたのは、拉致られてから一日以上経つてからだった。

3. バルトの海（後書き）

お気に召したら、軽く評価ボタンを押してください。
軽く。

4・水着

底抜けに青い空。暖かいを通り越した、あきらかに熱帯性の気候。やんわりとした風に漂つてくるのは潮の匂い。

暑い。いや熱い。

ギラギラという擬音でしか表現できない、強力かつ容赦ない太陽光が恨めしい。緩やかな風が吹いてなかつたら、とても立つてなどいられない。

空港は立派だった。

旧日本軍が作つたという、大型旅客機も発着可能な滑走路が一本。一本だけ伸びていた。

随分金がかかっているらしく、夜間発着も可能とのこと。後は小屋が一棟と、てっぺんに吹き流しを一本揚げた管制塔がそびえ立つていてるだけ。

移動時間と時差の加減もあるのか、ここゼクトールは、朝の早い時間帯だった。

「ビバ、南海の孤島」

桃矢の歓声は生ぬるかつた。『陽気な単語に反比例して、勢いがない。

一日程度の再会なのに、久しぶり感の地面。よく日に焼けたコンクリートの感触を通学靴の底に感じながら、桃矢は大地を踏みしめた。

目の前に広がるこの光景。桃矢は似たような光景を何度かテレビで見た記憶がある。

外国から要人を迎えるときの、あの光景。あの式典。出迎えの音楽隊が、ゼクトール国歌らしき、のんびりした調べを演奏している。

「常夏の一、国、ゼクトルル。南海いにい、浮かぶ島あー」桃果が即興で詩を乗っける。四拍子で構成された実に平和な国歌だ。とても桃果が主張するよつた戦闘国家には見えない。

が、なにか違和感を感じる。

「なに？ やつぱ暑いから？」
樂団員は、全員女の子。中学生くらいか？ まあ、それはそれでアリだろ？
問題としているのは服装だ。上半身は白いセーラー服。まあ、これはこれでアリだろ？
解せないのは下半身。スカートもズボンもはいてない。全員ハイレグの白い水着。……と、白のブーツ。

この地方の風習なのかもしれない。なにせ暑いからね……周りは海だし。

桃矢は結論づけた。これは南国ゼクトールの風習だ！
ハワイの空港で出迎えてくれるお姉ちゃんは上半身ビキニの水着じゃないか。なら下半身水着の国だつてあるはず。ワンピースの水着つてのが健康的じゃないか！ いやあ、ゼクトールつてさすが南国だなあ！

……なわきやねえだろ！

桃果はどう受け取つたのだろうか？ 後ろを歩いてくるはずの桃果を振り向く。

目が……、桃果の目がわずかに細められていた。細めた猫の目に似た形。

だめだ！ 完全にゼクトールを気に入っている。

これは……桃果を置いて、一人脱出という選択肢も……あるいは。

そんな風に考えていたら、桃果が手を握ってきた。色っぽい握り方ではない。あえて言うなら手錠的な握り方。

桃果の顔を覗き込んだ。逃げたらコロスと彼女の目が言つてる。

「ゼクトール王宮へ向かいます。この国の重鎮達が、首を長くしてトーヤ様をお待ちいたしております」

よぼよぼの爺様が運転する、オールドファッショソのリンカーンに押し込まれる桃矢達。

沿道には大勢の人が繰り出していた。手に手にゼクトール国旗と日の丸が握られ、ハゲシク振られている。熱烈な歓迎である。

桃果は嬉しそうに手を振り返していた。

「ほら、桃矢。ボサツとしてないで手を振つてあげなさい！」

氣乗りしない表情で手を振る桃矢。ボーとしていた桃矢だが、ふと氣付いた。

道々で旗を振る人々。日本の夏とそう変わりない服装。桃矢と同世代の女の子が、黄色い歓声を上げている。一人や二人ではない。三桁に上る数だ。

桃矢の集中力が、ピーキーかつクイックレスポンスで上昇した。あらためてよく観察すると、グラマラスな大人のお姉さんも多数混じつておられた。

旗を振るたび、揺れるバスト。ワンアクションヒット、くねるヒップ。柔らかそうな太股。

……いや、健康的な意味で。

水着を着ている女の子はいないが、みな薄着である。暑いから当然だ。

俄然、男前の顔をする桃矢。手の振りも、きびきびとしたものに変わる。

……いや、健康的な意味で。

視線を感じて振り返ると、桃果のニヤニヤ笑いがあつた。
これはまずい！ このままでは、しめしがつかない。

「いや、ほり、別に国王になることを認めた訳じゃないからね。だつてこんなに歓迎されて、いい加減な態度できないでしょ？ いや、健康的な意味で！」

たまらず桃果が噴きだした。桃矢の沾券が回復するのは、遠い未来のようだ。

一分十五秒のドライブが終わり、運転手がブルブルした手でドアを開ける。

降り立つた先に構えているのは白亜の。

「ここがゼクトール王宮です」

「まあ、予想は付いていたんだよな」

ミウラが案内してくれたのは、築五十五年、木造二階建て。

白の剥げかけたペンキを基調とした外観に、いろいろと飾り的な装飾が施されている。

田舎の村役場より、よっぽど金のかかった建物だ。
ありていに言つて、桃矢が住んでいた土地の市役所より劣る。

「間を取つて町役場だな」

桃矢は、なにもバッキンガム宮殿やノイシュヴァンシュタイン城を想像していたわけではない。が、やや撫で肩姿勢で歩いていた。

「お城つてイメージじゃないわよね？」

桃果も、同じことを言いながらミウラの後について歩いていく。

「狭いながら、王宮には美術館や図書室、卓球場などが入つてあります。もちろん、各行政機関も全て収納しています」

「卓球場の意味が解りませんが、なるほど立派ですね」

「ありがとうございます。では、ゼクトール政府の重鎮達を紹介いたしましょう！」

王宮玄関先で桃矢達を出迎えたのは、水着姿の九人の女の子達。
「えーと……」

言葉に詰まつてるのは桃矢だけではない。桃果も黙り込んでいる。むしろ、声を出せただけまだましである。さすが男の子。

ゼクトールは混血が進んでいるのだろう。いろんな人種が混じっているようだ。

その中で、黒縁眼鏡をかけた、一番背の高いお姉さんが一步進み出た。

「わたくしはジョベル・オルブリヒト。日本では総理大臣に当たる宰相を勤めさせていただいております。トーヤ様は戴冠式を済ませておいでではありませんが、事は急を要します。トーヤ様のお立場は、これ以後、事実上の国王であらせられます」

明るいブラウンの髪を後ろに流した大人のお姉さん。透けるように肌が白い女人。背が高く胸が大きい。くびれたウエストに張りのある腰部。皿の置き場にやたら困る。

「よろしくお願いいたします、トーヤ様」

「あ、よろしく願いいたします」

後頭部をガリガリ搔く桃矢。アガッているのは火を見るより明らか。

しかし、一国の首相にしては若すぎないか？　若作りをしているよつには見えないが。

「失礼ですが、ジョベルさんはおいくつですか？」

堂々と女性に年を聞く桃矢。

「二十四才です」

「こやかに答えるジョベル。やはり若い。若すぎる。

これを機にして、ゼクター政府重鎮達の血口紹介が始まった。

「国土交通委員長のエレカ・フリフラー。今年で十八才……です！」

シラーの黒髪と漆黒の瞳が白い肌に映える。

つぎの子は、無言で頭を下げただけだった。青白い髪がゆらりと揺れる。

「あ、この子は文部科学委員長のミラ・ロコモコ。十七才。ほんと無口で困るよね」

ミラの頭を平手ではたくエレカ。はたかれているのに、まったく無関心顔のミラだった。

「農務委員長を拝命しました、ノア・モフモフ、十三才です」長く垂らした三つ編みが可愛い。身長も胸も小さいながら引き締まつた体つき。

「ががが、外務委員長のサラ・プロプロ、十三才です。よよよ、よろしくお願ひします」

おかっぱ頭で、接触感覚が柔らかそうなイメージの幼児体型。

以後、十八歳の商務委員長ジムル。十六歳の財務委員長マープル。十五歳の法務委員長アムル、と続していく。

「口一口している桃矢だが、実のところ、内心、ものすごい疑念が渦巻いている。

居並ぶ委員長達の共通点を桃矢は発見したのだ。多分、桃果も気付いているだろ？。しかしこれほど聞きにくいものはない。

「そして最後に、国防委員長を務めさせていただきます、ミウラ・ヴァイツ。十七才です」

ミウラの挨拶がどめとなつた。桃矢は、たまらず疑問を口にした。

「ゼクトールの閣僚には、年齢や性別に制限があるのですか？」

九人の委員長達、すべてが女子。宰相のジェベルが最年長。でも二十四才。

OLSが一人。高校生が五人。中学生が三人。平均年齢、十六・八才。

つか、日本の法律では、ジェベル以外全員未成年。

彼女たちが自分に仕えてくれる。嬉しい！ でも不安！

低い次元の狭間で揺れる桃矢であった。

4・水着（後書き）

次回、5・最終防衛ライン。
なにが最終防衛ラインなのかw

誤字脱字の指摘・感想お待ちしています。
僕力ノの感想もお待ちしてます！

5・最終防衛ライン

「疑問は『こもつとも』
艶然と笑うジエベル。意味無く『テヘヘ笑いを返す桃矢。桃矢に足
を踏まれた。

「ゼクトールは、主立つた産業のない小さな島国です。小島嶼開発
途上国として、国連に認定されています。政府財源は、国民の出稼
ぎによる送金に頼つていてる次第です」「

「だから、なんで若い子ばかりが……あ！」
あることに気がついた桃矢。そういえば、沿道で迎えてくれた國
民の皆様方。全て女性ではなかつたか？

「まさか？」

仮説が確信に変わる瞬間。

「まさか成人男子全員が、海外へ出稼ぎに出てる……とか？」

いいところを奪い去つたのは桃果。彼女の顔に張り付いた笑みが、
紙のように薄つペらい。

「その通りです。我がゼクトールでは、一家を支えるのは男の仕事。
そしてゼクトールには主立つた輸出産業がございません。ゆえに労
働可能な男子全員、家族を残して諸外国へ出稼ぎに出向いています。
ゼクトール人は実直勤勉、そして忠実な国民性で有名なので、引く
手あまた。最近は主に中東方面での雇用が増えています」
ジエベルは肯定した。

他の委員長達も頷いている。彼女たちの父や兄は、遠い異国で身
を粉にして働いているのだ。そして、年老いた祖父母のため、ある
者は妻や子供達のために、またあるものは母や妹たちに、稼ぎのほ

とんどを送つてゐるといつ。

「立派ね！ あたしの両親なんか、恥ずかしくて語れないわね。家族のために歯を食いしばる。美しいわ！」

自分の世界に入り込む桃果。遠い一点を見つめている。

「まあ……、こよりは美味しいものや面白いものがあるので、それほど歯は食いしばつていないうですが」

「美しいわ！」

現実から目をそらし、オリジナルストーリーを完成させる桃果であつた。

「そしてもう一つ。ゼクトールの政治的慣習が関係します」

ジェベルの次の言葉を目で促す桃矢。

「ゼクトールの政治体系は、絶対君主制。王の権限は絶大です。よつて、ゼクトールにおける閻僚とは、王の指示の元、各部門での実行機関にすぎません。つまり委員会。そして、国王が亡くなつた場合、政治家と呼ばれる者達は、一斉に引退します」

大昔、日本や中国では、大王が死ぬと側近の者や使用人が殉職させられる。そんな話を思い出した桃矢。あれは大昔の風習。

ジェベルは言葉を句切つたまま、桃矢と桃果を交互に見ている。

二人の理解度を測つてゐるようだ。

二人ともここまで付いてきていると判断したのだろう。ジェベルは、話を続けた。

「貴族と名乗るのはおこがましいですが、私たちは家ごとに各委員会を受け持つています。そして代々、長の地位を受け継いでいるのです。たとえば、我がオルブリヒト家が全委員会をまとめる、いわば委員会会長の家柄。そしてミウラのヴァイツ家が戦人の長、マープルのミートン家が王家の倉を預かる家柄」

桃矢は、再び日本の歴史をひもといていた。大和朝廷の時代、家々によつて、ある程度担当する役職が決められていたような？

いつものように桃果に視線を向ける桃矢。くりっとした可愛い目を見開いてジェベルの説明を聞き入つていた。桃果も驚いているようだつた。

違う！ 彼女は、初めて聞くシステムとして驚いているのだ！ 桃矢は、桃果は歴史がからきし駄目だったのを思い出した。

「国民総所得の低いゼクトールでは働き出す年齢が低いため、法律では十三才で成年と見なされます。ついでに言いますと、わたくしの祖々母は、十四才で宰相に就任したという経歴の持ち主です」

「ま、まあ、国事情だよね」

一つの謎は解けた。こりるはもう一つの謎。

後で聞きにくいこと。いまなら勢いで聞ける気がする。

「その辺は理解できましたが、……みなさん水着なのは何故？」

漆黒の水着を着ているジェベル。あきらかにサイズが一つ小さい。砲弾型に突き出したバストと相まって、勝手に視線が首下に移動するという男の性に、さつきから桃矢は苦しんでいるのだ。

それだけならまだしも、タイトミニースーツを着込んだミウラ以外、同年代の女の子が下半身水着姿である。何人かはハイレグだ。おまけにゼクター女性は、美人ぞろいでナイスバディ！

間違いを起こしそうでとても怖い。それ以前に桃果の仕置きが怖い。

不可侵の領域へ足を踏み込んだ感の桃矢。いろんな意味で緊張している。

「桃矢、鼻と唇の間が長くなつてゐるわよ

桃矢が鼻に手を当てる。それを見て、またもや笑いを堪える桃果。

「これはゼクトールの風習です」
ジーベルの答えは簡潔だった。

「元々は宗教上の理由からですが、王が変わると、みな一斉に衣を替えるのです。制服のデザイン選択は、新しい王にまかされます。つまり王の好みでいろんなタイプの制服が生まれるのです。トーヤ様の代に変わった今、制服もトーヤ様の趣向に合わせて替えるのが習わしです」

「え！ じゃ、その水着は先王の趣味？」

「ここにこ笑いながら頷くジーベルの水着が黒光りしていて眩しい。「先々代は、上がセーラーで下がマイクロミニ」という制服を採用されていたそうです」

遠き過去に、勇者を見る桃矢。

「さて、トーヤ様におかれましては、どのようなデザインがお好みででしょうか？ 全員の分を揃えるには時間がかかります。お話しでに、今ここでお伺いしたいのですが……」

ジーベルの言葉に、桃矢は唾を飲み込んだ。

「ど、どのようなモノでも？」

「これはアレだ。服という文化を手に入れた代わりに失った物を。

「王の命令は絶対です。死ねと言われば、喜んでこの命、捧げま
しょう！」

ミカラが直立不動の姿勢で宣誓する。後ろに控える家臣団の女子達も首肯してる。

「たとえば、……」この国、暑いしね。……自分の好みと「よりは、みんなの快適性を第一に考えてるんだけど……いやあ暑いよね？熱帯だし。……そこで提案なんだけど……」

「なんなりと」用命下さい！」

真剣に受けたミウラ。きりりとした眉がりりしい。

「それじゃ、上半身裸にな」

そこから先は、桃果にネックブリー カーをかけられたので喋ることができなかつた。

「乳房を出すのは恥ずかしい事ですが、王の命令とあれば仕方ありません。制服代が安上がりで済むのが救いです」

平然とした面持ちで肩から水着をずらしだすミウラ。ジエベルやノア達も頬を朱に染めながら、次々と肩を出しあげた。

「ストップ！　ストップです！　命令です、王の訂正命令！　今はナシ！」

ネックブリー カーを解かれた桃矢。解かれた意を解し、必死で訂正の弁を振るう。

「今まで変更無し！　僕と先代国王は趣味が一緒みたいですね！」

泣きながら、しかし、ギリギリのラインだけは守り通した桃矢であつた。

5・最終防衛ライン（後書き）

次回、6話・記念写真

かみんぐすうーん！

明日、昼に上げられそうだ。

「「」のままでおろしいのですか？トーヤ様！」

大きな声が閣僚の中から上がった。フリル付きの赤い水着が可愛い十六才の財務委員長、マープルである。

「ありがとうございます！」ぞこしますトーヤ様。財務を預かる者として心よりお礼申し上げます！」

両手を祈りの形に組み、目から涙を溢れさせるマープル。何度も頭を垂れる。

「え、泣くこと？そんなに今の水着が気にいつ？」

桃矢の足を桃果が強く踏んだ。

「財務委員長が感謝することと言えばお金の話ですよね？」

桃果が肩で桃矢を押しのけて前に出た。笑顔のまま、しかし眉がつり上がっている。何かに気がついたようだ。

「制服を一時に何百着も替えるには、まとまった金額が必要よね？」

「あ、そうか！」

そこまで言わされて桃矢も気付いた。桃果の後ろで。

気付くのが遅かった。気の付かない男と思われるかもしれない軽い後悔が立つ。

それにも、桃果は異様に頭の回転が速い。……桃矢の頭を押さえるため限定だが。

「桃矢は……いえ、桃矢様は、無駄に財政を支出するなと言わされているのです」

「トーヤ様！」

花が咲いたような笑顔を浮かべるマープル。

そして日々に謝意を唱える女の子達……もとい、各閣僚。桃矢、モテモテである。

桃果の機転が桃矢の面目を立たせた。感謝！ した瞬間を計つた

かのように、ちらりと

振り返る桃果。目が……イタチ目をした瞳に「貸し」の一文字が浮かんでいた。

引き替えに、桃矢は女の子……もとい、全閣僚の信任を得たと考えればいいはずだが、それにしては借り入れた金額が大きすぎる気がする。

「ではみなさん、せめて胸の谷間だけでもお出ししましょうか？」ジエベルは胸に手を掛けたまま。真剣な顔をして同僚達に相談を持ちかけた。

「谷間かー、……ジエベルさんに比べられると、ちょっと辛いんだよなー！」

国土交通委員長のエレカが早速行動に出た。ボーアッシュな彼女。蒼い競泳水着の胸元に手を乱暴に差し込んで、ごそごそしている。何をつかんでいるのだろうか？

「……」

無言でペールブルーの水着をはだけていくミラ。マープルの言葉を額面通り受け取ったのだろう。薄水色の目が虚ろなのは動搖のせいか、それとも元々の性格によるのか？

「トーヤ様の命とあらざるミラ、軍人として一命をも投げ打ちましょー！」

顔を朱に染め、勢いよく胸元をはだけるミラ。彼女は、十七才

とは思えない質量感の持ち主だった。

あつとこう間に中高一貫校の女子更衣室と化した国王執務室。どこの神様かわかりませんがありがとうございます。桃矢は神の奇跡に感謝し、一生ついていくことを誓った。

「いえ、それほどでも

「え？」

桃矢の思考を読んだとしかいえないタイミングの相づち。いつた
い誰が……。

「待ちなさいーーいつーー！」

大声を張り上げたのは桃果。神の威光を地べたに引きずり下ろす
悪魔の咆吼！

桃果に視線を向けた。
顔を赤らめた者、白髪彦やどじ吹く風の者、全てが白衣を中断

「国王がいつ、ぱいぱいを放り出せと言いましたか？」
怖いくらいに平常で冷徹な声を出す桃果。

ふんっ！ トーヤ様のお付きだかなんだか知らねえが、桃果様？

可愛い谷間を放り出したまま、詰め寄るH

寄せて強調している

「ふつ！ よくいるのよね。胸を放り出すだけが色氣と勘違いして

る小娘コトハ

両手の平を上に向け、ヤレヤレのポーズを作る桃栗。

んだとおー！」

袖まくりのポーズで詰め寄ろうとしたエレカ。それを押しとじめるユウタ。

桃果はエレカを挑発するように、芝居つけたっぷりに話し始めた。
「あらあら、見せた後はどうするの？ それ以上、なにを見せるの
？」

「何つて……そ、そそそ、それをここで言わせるのか？」

額に汗を浮かべるエレカ。言葉に詰まる。

言つてくれ、その単語を！ 神よ、魔神に負けるな！ 神に祈る
桃矢であった。

「お下品ね。おほほほほ！」

桃果は芝居氣たっぷりに笑いながらクルクルと回転。ビシリと人
差し指をエレカに突きつけて回転を止めた。

「見せてしまえばお終い。見せずには魅せる、という意味が解る？
桃矢陛下は脱げとはおっしゃつてない。その意味、わかるわよね？
男と女の高等な遊びよ。まさか、エレカ委員長ほどの女性が、桃
矢国王陛下をそこら辺の男と同列に扱つてないわよね？」

出来の悪い生徒に教える女教師よろしく、人差し指を立て、ゆつ
くりと左右に振る桃果。

「な、なるほど！ わたしは恐れ多くもトーヤ様を見くびつていた
ことに……くつ！」

エレカは力なく床に膝をつき、うなだれる。見かけや態度に似合
わぬ素直な性格だった。

一方、桃矢も神の無力さに絶望し、背中を丸めてうなだれていた。

「ハイハイ、みんな元通り水着をなおして！ 規律の乱れは服装か
ら。注意しましょう！」

着衣を乱す音と直す音。同じ衣擦れの音であるのに、あまりに大きな違い。自分の思考力が回復していく様に無情を感じる桃矢。ま

た一步大人になつた気がした。

そして、大人になつた桃矢は開き直つていた。

「もう一つ疑問があるんですが」

ものはついで。聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥という諺が、桃矢の頭の中をぐるぐると舞つている。

「これも最初から思つてたんですが、みなさん、なんで日本語を流暢に話せるんですか?」

「そういうえばそうね。いままで氣にもかけなかつたけど」

剛気な桃果はさておき、ここまで会話、全て日本語である。

「トーヤ様が次期国王と承認された時、ゼクトールの第一公用語を日本語に制定したのです。それからの我らは、一日二十四時間二十五時間の猛勉強をして日本語をマスター致しました」

皆、一様に胸を反る。ジエベルはもとより全委員長が胸を突き出す。九対十八房の誇り。

壯觀である。

神はまだ、桃果に滅ぼされたわけではなかつた。桃矢は神の無事に安堵した。

「わたくしは無事です。どうかご安心を」

今、桃矢は確かに神の声を聞いた。

「ではこれより、新政権誕生による記念写真を撮りまーす！ その後はみんなそろつて朝食ですよー！ はい並んで並んで！」

ジエベルの号令の元、呆然とする桃矢を中心として、わらわらと集合する委員長達。

ちゃんと桃矢の隣に位置し、爆笑中の桃花を筆頭に、みんな笑顔で写真に収まつたのだった。

6・記念写真（後書き）

次回、「王座」

王の権限とは？

王の栄光とは？

∴「玉座」になるかもしだれない。

「えーと……」

桃矢が狼狽えていた。

映画やテレビでよく見る、南国情緒たっぷりのシーン。

天井で、厳かに回転する巨大なプロペラ。白いテーブルクロスが眩しい長テーブル。色とりどりの花や溢れんばかりの南国フルーツを盛った美しい器。

長テーブルの両脇に少女達……もとい、何らかの閣僚達が、何らかの順に、並んで座っている。

一人ずつ、スク水にエプロン姿の愛らしい少女が……もとい、給仕がついていた。

面食らった感の桃矢であるが、国王なんだから当然上座。不満そうにしている桃果が次の座。

「ジエベルさん、これって朝ごはんですよね？」

ナイフとフォークを持った桃矢。これから朝食メニューを平らげようつとこうのだ。

「はい、なにか不手際でもございましたでしょうか？」

「いや、その、量がね……」

顔を見合わす桃矢と桃果。そう、量が問題だった。

鉄板の上で、音を立てて蒸氣をあげる、広辞苑のような六百グラムステーキ。の、上に置かれた目玉焼き五個。の、上からかけられた濃厚なデミグラスソース・マッシュルーム入り。ギラギラとしたラードが自己主張している。

桃矢は線が細いくせに燃費が悪い方だ。でも、朝からこれはいくらなんでも無理だろう。

「こんなのがゼクトール王の食事なんですか？」

「げつそりとした桃矢がジエベルにたずねる。

突然、大きな音がしてドアが開いた。驚いてドアの方を見る桃矢護衛兵の女の子達（競泳水着姿）が泣きそうになつてしがみつくのを歯牙にもかけず、突進してくる巨大な肉塊が二つ。

「こんなので申し訳ございませんっ！　トーヤ様あつ！」

一人はガラガラ声の老人だった。一メートルをかるく超える巨漢。ちりぢりの黒髪を肩まで垂らしている。顎鬚が濃くて長い。ひよこのアップリケがついた白いエプロンをつけていた。

「本来、八百グラムステーキに卵十個の所、たつた五個で調理してしまいました！」

テンガロンハットを被つたもう一人の老人が、膝をついた。一メートルにわずか足りない長身。金髪でボブカット。立派な髪を鼻の下に蓄えている。こちらの老人はピンクに白いフリル付きのエプロン姿だ。

抱きついて爺ちゃんの突進を止めている水着姿の少女、……もどり、衛兵達を、小さな子供を扱つかのように、一老人は軽々と抱き上げて下ろした。実際、衛兵は子供だったが。

二人とも筋肉が異様に発達している。そして見上げるよつた大男。

「ブロスにハセン。一一名ともそこへなおれ。トーヤ様に代わり成敗してくれる」

ミウラが、ワンアクションで拳銃を引き抜く。フルオートが握られていた。

桃矢はもとより桃果まで、突然の出来事に棒立ちだった。

「処罰は覚悟の上！ 我ら王室の調理を預かつて十余年。前王に請われるまま、当初から予算オーバーを繰り返して参りました。すでに王室維持費が尽きましてござります！」

ごつい両手を祈りの形に組んで、頭を下げるキングコングのような黒髪の巨人。

「どうか、どうかトーヤ様におかれましては、毎朝のステーキを半分の四百グラムにい！」

テンガロンハットの巨大コックが額を床にこすりつける。半分でも厳しい！ 正反対の意味で。

と、ここで桃矢の額、星形のホクロに嫌な色の光が走った。
「いやいやいや、ちょっと待って！ 朝がステーキなら、昼ゴハンはどうなるの？」

ある意味、興味が湧いた桃矢。怖い物見たさである。

「本日は一皿料理として……。トリュフのスライスで覆いつくしたフォアグラのブロッフ入りチーズとバターの濃厚クリーム肉厚ベーコンカルボナーラ太パスタを大皿で！」

桃矢の胃が防御反応をした。まだ食べてないのに、胃に膜が張つた感じがしたのだ。

「ちなみに、今夜のメニューは、ヘルシーな鶏肉をラード油で揚げた

「夜はいいわ！ 聞くだけで胸焼けしてきたから！」

両手を振つてメニュー解説を制止する桃果。彼女も王室の食生活に厳しさを感じたようで、眉間に皺を寄せている。

「ひょっとして、前国王がお亡くなりになつた原因つて、糖尿ですか？」

桃矢が小声で、銃を構えるミウラに聞いた。

「それも原因の一つですが、……その他に高血圧と肝硬変と腎臓結石と心臓動脈梗塞と大静脈瘤と脳梗塞を併発されて……。我がゼクトールの田舎医学ではどうしようもなく……」

「いやいやいや、医療先進国でもそれは助からないよ。つーか、誰も食生活を改善させなかつたの？」

血が滲むほど齧を噛みしめるミウラ。ジョベルはじめ各閣僚もうつむいている。

「それは……許されないことです」「やはり口を開いたのはミウラ。

「王の命令は絶対です！ まして王家の伝統ある風習。我ら臣民、口出しなどできません。我らの生と奪権は王にあり！」

口を真一文字に結ぶミウラ。目に危ない光が灯る。

「部下の責任はわたしの責任。ここはわたくしが！」

こうなり自らのこめかみに拳銃を向けるミウラ。閣僚達は誰も止めよつとしない。

そして、銃が火を噴いた。

「危ないって！」

間一髪。桃矢がミウラの腕に飛びついていた。おかげで、狙いのはずれた銃弾が壁にめり込むだけですんだ。桃矢の口元が引きつっている。

「我らの忠誠は犬のことし！ 王の言葉は、神のご意志なり！」
その場に居合わせた者で、桃矢と桃果を除くもの全てが声を揃えた。國の標語なのだろう。それにしてもヤバイ連中だ。

桃矢は、どうしていいかわからなくなつて、視線を桃果に向かた。助けを求めるかのように桃矢を見ている桃果がいた。

「恐るべき忠誠心ね！」

桃果の漏らした言葉。桃矢は、ハタと気づいた。そして、こう提案した。

「その伝統料理を出すのは、國の記念日だけにしませんか？ 例えば、建国記念日とか誕生日とか」

「ゼクトール王である桃矢様による、記念すべき初めてのまともな」

「命令よ！」

桃矢の提案を勘のいい桃果が補足する。

桃果が勝手に抜き払つた伝家の魔剣、いや、宝刀・國王命令。ミウラ達は、魔法の呪文にひれ伏した。

虎の威を借る狐。桃矢はすぐにその故事を思い出した。が、口にしないほうがいいという知恵が備わっていたのは幸いであった。

「材料の運搬費だけでお金がかかりそうだもんね。それに、その方が王家の伝統らしくつていいよ。もつたいぶる方が、格式も上がるつてもんだ」

二人の提案に、ゼクトール人達が驚いている。一様に口を〇の字にして固まつっていた。

言い過ぎてしまつたかと思い、またまた視線を桃果にあわわせる桃矢。桃果は、堂々としている、目で答えてきた。

案の定。

「やはり、トーヤ様は王の器！」

「ゼクトールの国庫、ならびに国民の生活をこれほどまでに心配していただけるとは！」

閣僚達は勝手に勘違いしてくれた。

とても単純で、すぐに入を信じる正直者。おまけに良い方へ良い方へと考えるポジティブ指向。

食費だけでこの感謝。桃矢は大げさすぎると思ったが、先程の標語を思い出し、ゼクトールではこんなものなのだろうと一人で合点していた。

なんにせよ、ステーキ一枚で……。

「あ、そうだ！」

桃矢の頭上で豆電球が輝いた。

「このギザサイズステーキなんだけど、残すのももつたいないからみんなで食べようよ。僕が切り分けるから、みんな、お皿を持ってきて」

ナイフとフォークを手にした桃矢。言つたそばから早速切り分けている。

「トーヤ様っ！」

ミウラが叫んだ。

「え？　はい、すんません！」

とりあえず謝る桃矢。なぜ怒られたのか、理由がわからない。

「我らのような下々の者に、『自身の糧を自らお与え下さるとは…』びしりと敬礼しているミウラ。直立不動で涙を堪えている各委員長達。

長テーブルは感動の嵐に包まれていた。桃矢は口を開けっぱなしにしている。

しかし、人に感謝されるのは気持ちのいいもの。それにちょっと自慢。桃矢は頬に熱い血が通うのを感じながら、桃果に目を向けた。桃果も桃矢を見ていた。笑つて桃矢を見ていた。桃果とつておきの営業スマイルだった。

桃果がこの笑みを浮かべるとき。それは打算ずくの時。何がある。そこまで考えが及び、桃果の真意に気付いた。桃矢の脳裏に、ある入り口に立っているイメージが浮かぶ。

王座への入り口。

既成事実として、桃矢は自分をゼクトールの王と認める発言をしてしまっていた。

自らの手で、よりいつそう後戻りしにくくしてしまった！

桃矢は、自分の顔色が変わっていくのを実感した。それは、桃果が腹を抱えて笑っている事からも、うかがえるのだった。

7・王座（後書き）

玉座・王座・うーん。

次回、8・神よ！

物語は一気に宗教問題へ（嘘）！

仮眠具すーん！

8・神よ！

「ゼクトールは今、様々な問題を抱えています。それら諸問題を解決するためにも、この国には王が必要なのです」
残つているのは、今喋つているジェベルと、後ろで控えるリカ/リカだけだった。

ステーキ問題の後、各閣僚は、おのが仕事へと散つていった。

授業が始まつたのでいそいそと教室へ向かう女子校生を連想せらるその様は、ゼクトールの将来をそこはかとなく不安にさせるものだった。

桃矢にだつてわかる。常識的な問題。急な政変である。通常の仕事以上に緊急の仕事が降つて湧いたのだ。そして、国を運営する新しいスタッフは、慣れない上に経験も浅い。おまけに若すぎる。一分一秒が惜しいはずだ。

新しい国王に、国民はお祭り騒ぎで歓迎していた。めでたいことだ。政府もそれを奨励している。

桃矢はちょっと心苦しかった。一泊一日の王では、国民を騙すようなものだからだ。

「国民は、トーヤ様を新国王としてお迎え致しましたことを心の底よりお喜び申し上げております。これは紛れもない真実です。しかしまた、国民は、王家に對して神聖な格式を求めるものでござります」

ジーベルは、眼鏡の位置を指で直した。

「なんか、授業受けてるみたいね

桃果の感想は桃矢の感想でもある。

年齢と風貌からいって、新任の女教師で通りそうなジエベル。
…水着だが。

一方、学生服のままの桃矢と桃果。こちらはまぎれもなく現役学生である。

「即位式、つまり戴冠式を迎えて、初めて王となられるもの。逆に言えば、戴冠式を迎えるければ王として認められない、ということでもあります」

今の所、なんか意味深な感じがする。思わずノートに取りたくなつてしまつた桃矢である。

「時間は貴重です。長旅でお疲れのところ真に申しわけございませんが、トーヤ様におかれましては、これより即位の式を受けていただきます」

ますます、逃げづらくなつてしまつた。第三者的立場の桃果は、らんらんと目を輝かせている。異常なまでの乗り気である。天井を仰ぐ桃矢。

「なんつーか、こつ……神に祈りたい心境になつてきたんですけど」桃矢が呟く。ミウラとジエベルは計つたように互いの顔を見合せた。

「それはちょうどよろしくうございます」

ジエベルが慈母のような笑みを浮かべた。何がちょうど良いのかわからないが、美人が自分に笑顔を向けてくれるのは男として嬉しい。

「王位を授ける役は、ゼクトールの国教であるヌル教の神官長です。これから向かう先ですので、ついでにお祈りなされてはいかがでしょうか？」

桃矢の笑顔が固着する。今まで桃矢の側についていた神が、敵に

回った瞬間であつた。

「ジエベル様。トーヤ様からみればヌル教は異教です。トーヤ様に宗旨替えを願うのも無茶なお話ではないでしょうか？」

ミウラが、その微妙な空気を感じ取つた。方向が間違つてゐるが。「それは想定外でした。しかしこれは大問題です！」

桃矢の苦悩をよそに、別問題で考え込む一人の麗しき乙女。自分のことでの悩んでくれる美女一人という構図も、それはそれで、そそられるものがある。

そういえば、一日間限定だけど、この一人の生と奪権は自分にあらんだけ　なんて嬉し恥ずかしな妄想が膨れあがつてくる桃矢。ますます進退窮まつてきた。

ああもうどうしたらよいですか神様？　つて、神は敵だつたし。

までまで、僕は何処へ行こうとしているのか？　初心は何処へ行つた？　しかし、この立ち位置を捨てたくない。
人、これを堂々巡りと呼ぶ。

悩んでいる桃矢に白い腕が伸び、揺さぶつた。

「安心して、二人とも！　自由と生死を縛る強制をしないかぎり、日本人はどんな神様にだつて順応できるという属性が、生まれながらにデフォルトされているのよ！」

桃矢の胸ぐらをつかんで引きずり回しながら、桃果は拳を天に突き上げる。脳を揺すられグダグダになつていく桃矢。

「あ、あの、桃果様！　神という存在は魂に直結するもので、そんなに簡単には……それより、トーヤ様をそんなどんざいに扱つては

！」

ハラハラしながら、及び腰で桃果を制止するジエベルとミウラ。

特に、唯一神を信奉する者にとつて神とは、その辺の日本人が考
えているような生半可な存在ではない。日本人が「神に誓つて」
と言えばたいていの場合、嘘偽りを糊塗する代名詞となつてゐるが、
彼女らにとつては命を賭して守るための代名詞なのである。

ゼクトール人である彼女達にとつて、宗教を変えることなどあり
得ない。そして、万が一、信じる神を変えるということは、人生そ
のものが変わつてしまふ事。いや、それ以上の大事件なのである。
よつて、桃果の言つてゐることは、彼女達にとつて悪い[冗談以外
の何物でもない。

「じゃあ……。あたしなら、桃矢を表面上でも宗旨替えさせる」と
ができる。どうよ?」

言いながらも桃矢を揺さぶり続ける桃果。桃矢は、自分の脳がプ
ルンプルン揺れていけるのを実感した。

「お願いいたします、桃果様!」

桃矢は、飛びそうな意識の中、最敬礼をするミウラヒジエベルの
姿を見たのだった。

8・神よー（後書き）

次回、9・異空間感覚

ナニなナニ、登場の予定。

「午後よりパレードが用意されております。それまでの時間に、済ませるべき儀式を済ませ、各方面の知識を仕入れていただきます」ジエベルが、にこやかな顔でスケジュール帳をめくついた。

車に揺られること三分。

制服（水着）に着替えたミウラとジエベル、それに桃果と桃矢の四人は、ゼクトール本島から突き出した岬の入り口に立っていた。フライパンの柄の付け根部分に相当する場所だ。

朝の光の中、白を基調とした南国情緒に溢れる古い建物がぽつぽつと建っている。どことなく古い遺跡を思わせる地域。

ゼクトールは、珊瑚礁が隆起してできた島。大地の色は白が基本にして特徴。だのに、この辺り、つまり神殿地域だけが「黒い土」で出来た大地だった。

もう一つ。たいした突起物のない地形が特徴のゼクトール島。この位置から西の海を眺めると、丸い水平線の彼方まで一望できる。

「なに？」の反則的な透明度！ 海の底が見える！

桃果が感嘆の声を上げ、バカみたいに笑っていた。

南国の景色に、実によく似合う笑顔。太陽は緯度の低い地域でこそ底力を發揮する。

明るい太陽と美しい海。

脳震盪を引きずつてしまい、胃の中を一度は空にした桃矢だったか、気分は一発で晴れた。

空から見た珊瑚礁もすばらしかつたが、間近で見る珊瑚礁の海もまた別格である。

真っ白な砂浜に縁取られた島。エメラルドで埋め尽くした海。半島部分の周囲だけが深い藍色に染まり、色の多様性を楽しませてくれる。

海からの潮風に少し混じつたオイル臭が一点の曇りか……。

沖に浮かんでいるのは漁船だろうか？ すぐ側でイルカが三頭、並んでジャンプした。

「ついでですので、簡単なガイドなどいかがでしょうか？」

ミウラの機嫌が良い。美しい風景が彼女をそうさせるのだろう。きりつとした美少女バスガイドさんの観光案内。桃矢は一発で乗つた。

「お願いします」

桃矢を見つめる桃果の白い目に気付いた様子もなく、ミウラが案内を始めた。

「まず、ゼクトール周辺海域の特長ですが、我が国経済水域を囲むかのように、流れの速い海流に取り巻かれております。そのため、動力のない船舶による往来は不可能。これが第二次大戦末期に日本軍と接触するまで、わが国が国際社会より隔離されていた理由の一つです。そして、ゼクトール周辺海域は、季節風や主とした海流から遠く離れています。風らしい風が吹くのは朝と夕方だけ。台風やハリケーンと呼ばれる大型の暴風雨は十年に一度、来るか来ないかです」

たしかに、それなりの高台なのに、風が吹いていない。桃矢の頭頂で、おさまりの悪い一本の毛が、わずかに揺れるだけの微風しか漂っていない。

「ゼクトール島の周囲は、珊瑚礁のため、世界でも例を見ない遠浅です。よって、大型船舶は進入不可能。おまけに、そこかしこにバリアリーフが存在し、上陸用舟艇でも座礁の危険性があります。つまり、本島に着岸できるのは小舟のみ。」こういった事象が、国土防衛に一役買っています」

ミウラのガイドは、国防長官のものであった。「はあ」としまりのない口で相づちをうつ桃矢。桃果が、また向こうに向いて肩を振るわせている。

「反面、大型漁船や連絡船なども接岸できない、といつテメリットもありますが」

ミウラが岬の先っぽを指さした。桃矢と桃果は遠い海域を見ることになる。

ゼクトール島を取り巻くエメラルドの海を割つて、深いゴバルト色の海が長く西に伸びている。それは海の中の川のようだ、遠くまで一直線に伸び、外洋の蒼に繋がっていた。

「色の濃い部分は水深が深いのです。何故こうなったかは、今もって解説されていませんが、ゼクトール本島に繋がる唯一の、海の回廊です。ここを抜けないと、桟橋や港に停泊できません。海上防衛はこの地域、一点に絞れます」

あまり興味のない話なので、何とか話題を変える算段はないものかと、桃矢はいつものごとく桃果に救いを求めた。

「海軍艦艇は？ もちろん高速艇よね？」

桃果は目を輝かしてミウラの防衛計画に聞き入っていた。……ので、諦めた。

「小型高速艇が三隻。常時この海域に展開されています。型は古いですが、整備回数を多く取つてるので常に万全です」
うんうんとうなずく桃果。目が輝いている。

「それから、遠くに見えるあの島影」

遠く、海の道に少しかかるように、小さく黒い島が見える。からうじて直角三角形をした島影が見て取れた。

「あれはミヨーイ島と申しまして、漁業の補給基地になつております。本島から遠く離れた島です。おかげでゼクトールの経済排他的水域が広がつているのですが」

「

ミウラの長い説明の途中、周囲が急に暗くなつた。桃矢はそんな気がした。

桃矢一人がゆっくりと後ろを振り向く。視線を感じたのだった。

9・異空間感覚（後書き）

次回、
・ゼクトール

尖った視線にレッヅゴー（死語）！

尖った視線だった。それでいて痛くもなければ冷たくもない。懐かしいような、非難されているような、なんとも不思議な感覚。

振り向いた先は、古いゼクトール様式の建物。正面が暗い口を開けていた。

闇の前に女の子が立っていた。年の頃、たぶん十才未満。……たぶん人間。

ゼクトール本来の民族衣装なのだろうか？ 丈の長い原色の布が、そこかしこから垂れ下がった特殊なデザイン。それが異国情緒を醸し出している。

耳の脇を色つきの紐で縛り、前髪を揃えた長い黒髪。その頭頂でおさまりの悪い毛が一房、揺れていた。

しかしその少女、肌の色が変わっている。青白い。血の気が無いという表現は間違っている。「青白い」という色の肌なのだ。

その子がじつと桃矢を見つめている。特に怖いというわけではない。どちらかと言えば暖かい目。桃矢を呼んでいるような目だった。大きくなつたらすごい美人になるだろうな、などと、邪な事まで考えていた時。

「これはイルマ様。御自らのお出迎え、誠に恐縮至極で」ぞいます。横合いから声が湧いて出た。ジェベルが少女に気づいたのだ。

「イルマといつのか、あの子は」

もう一度、イルマと呼ばれた少女に向き直る。イルマを含めて、三人の女性がこちらに向かつて歩いてきた。三人。さつきまで一人でいたような……。

イルマは、後ろに年上の女官を一人連れていた。後ろに付き従う女官達は、イルマが身につけた民族衣装の簡略型を身に付けていた。似たようなスタイルが三人並んでいることになる。

イルマは、桃矢の眼前で歩みを止めた。息づかいまで聞こえる距離だ。

入つてはいけない結界を破る緊張に、桃矢の体が震える。

身長差のため、桃矢を見上げる格好のイルマ。

「そのほうがトーヤか？」

イルマの地位がそうさせるのか、慇懃無礼なものの言い様だった。

「え、あ、はい。芦原桃矢です」

またなんか面倒なことに巻き込まれそうな予感がしたので、丁寧に答えておく。

「だんだん、低年齢化していくのね」

桃矢の意図を壞すかのような桃果の一言。

「年を気にするのは年寄りだけなのだ」

その一言に、イルマが噛みついた。噛みつかれたら噛み返すのが桃果である。

すーっと、桃果の手が伸びて、……あつさり結界を破る桃果。

イルマの頭をポンポンと軽くはたいた。殴るでもなく撫でるでもない微妙な力加減。

これに過激に反応すれば子供っぽく見られるだろう。ずるい手だ。

「気安く予に触つてはいけないのだ！」

長い袖を宙に舞わせ、邪険に桃果の手を振りはらつイルマ。子供であることを周囲に印象づける結果となつた。

ジエベルが中に割つてはいる。

「紹介が遅れましたね。こちらはイルマ・フタフタ・ゼクトール様。御年九才。ゼクトールの国教であるヌル教の神官長であらせられます。若いながら、歴代神官長の中でも一・二を争つほどの能力をお持ちです」

「よしなにな！」

えらそうに腕を組んでふんぞり返つた。握手など求めない。

営業用スマイルを浮かべた桃果が一步前に出る。

「あたしの名は」

「その方の名は聞かずともわかるのだ。騎旗桃果よ」

ズバリ名前を言い当てるイルマ。

「え、なんで桃果ちゃんの名を？」
びっくりする桃矢。その反応に対し、無邪気な笑顔を浮かべるイルマ。

「バカ桃矢！」

一方。桃果は、ものすごく嫌な顔をする。

「前もつて連絡が行つてれば、わかることでしょう？ 種のない奇跡なんてあるワケないし！」

肩をすくめる桃果。

「ひねた桃果と違つて、トーヤ殿は素直だ。なかなかに良き反応をする。気に入つたのだ」

うつて変わって、大人びた笑みを浮かべるイルマ。腹に一物を持つ女の笑みだ。

「ずいぶん背伸びしたお子チャマね。てか、強がらないと周りから子供扱いされるのね。幼いのに……不憫ねえ」

イルマを哀れんだ目で見る桃果。桃矢には解っていた。その目は芝居だと。

「な、何を哀れんでおるのだ？ 予は自分を不幸などと思つてはおらぬのだ！」

両手をバタバタと上下に激しく振り回すイルマ。ちょっと可愛い。「ジエベルよ！」の緊急時にシロウトを巻き込んでどうするつもりなのだ？ ケティムは民間人だろうが外国人だろうが関係無しなのだ

遠慮ない敵意がこもった視線を桃果に向けるイルマ。

「桃矢が即位すれば懸案も落ち着くんでしょう？ それよりケティム共和国がどうかしたの？」

桃果だって知っている国、ケティム共和国。

地図で見ると、ゼクトールのずっと北にある大きな国だ。

最近、海外からの投資も多く、経済的に伸び盛りの国。新聞にその名が載らない日はない。良くも悪くも、ケティム一国の動向が世界情勢を一変させるだろうと言われている。

人権擁護や自然保護はCクラス。だが、軍事においてはAクラス。核保有国もある。

そのため日本はもとより、アメリカやロシア、EU諸国から中国、インドまで、刺激を避ける傾向にある。

「ジエベル、ミウラ、その方ら、まだ話をしてないのか？」
ジト目のイルマ。

「申し訳ありません」

受け流すジエベルと、田を呑わせられないでいるミウラ。性格の違いが現れた。

ジエベルやミウラの対応からして、このイルマという少女、……神官長と言つてはいたが、地位は王に劣らぬ程のものらしい。

桃矢は苦手な世界史を思い出していた。宗教上の長、カトリックの教皇の権威は、ヨーロッパの皇帝や王よりも上の存在であること。イルマは王を承認・任命する立場。教皇と同じ立場にある、と桃矢は踏んだ。

それはそれとして……。

「ジエベルさん、ひょっとしてゼクトールはケティムと揉めてるんじゃ……？」

桃矢は、難しくて嫌な展開を想像していた。

「ケティム共和国ね？　水上艦隊を多数所有してるわ。確かに最近、空母を建造したわねえ。通常型の潜水艦は二桁所有してるし、弾道ミサイルを積める攻撃型原潜も何隻か持つてはるはずよ。海兵隊も持つてるし。そうそう、空軍の主力は、スホイ設計部が誇るマルチファイターのSU27。条件によつてはステルス機でも落とせるつて噂のヤツ」

桃矢の質問を遮る桃果。この辺は彼女の得意分野。スラスラとケティムの軍事情報を解説してみせる。

目を輝かす桃果。キラキラと顔が光つてゐる。桃矢は、桃果の輝きを消したくなかった。だから、このまま話に流される事にした。

「む、なかなかやるではないか！」

イルマが桃果を見直した。桃矢は思う。それは早合点だと。

桃果が各国の軍備や兵器に詳しいのは知っている。しかし、興味のある方面だけ。しかも薄く浅く中途半端に。

それが証拠に、陸軍は全くの無知だ。陸軍は汗臭いから嫌い、といつちやんとした理由があるらしい。

「まあよい。めんどくさい話は、後ほどジョベルにでも聞くとよい。ひとつと用事を済ますのだ。トーヤとミウラ、ついでに桃果の三人！」

ぐるりと向きを変えるイルマ。女官にかしづかれてしづしづと歩いていく。

イルマは、桃矢達がついてくることを当然のようにして、宗教施設の中へ入つていったのだった。

10・イルマ・ゼクトール（後書き）

次回、アンダー・ザ・グランド

ゼクトール王国、最深部ヘレッジー！

11・アンダー・ザ・グラウンド

「即位の儀には陽と陰、二つの儀式があるのだ。そこ！ よそ見して遅れるでない。神殿地下はラビリンス。迷子になると生きては出られないのだ」

暗闇の中、イルマの持つランタンの光だけが頼りだつた。

外からは想像もできない長くて複雑な回廊を、下へ下へと降りていく。石造りであろう、すり切れた階段を下りた先。桃果の愚痴を聞き飽きた頃、材質不明の巨大な扉の前に出た。

馴染みのない幾何学紋様が、シンメトリカルに描かれた重量感溢れる観音開きの扉だ。

片面だけでも十トンは超えているだろう。

開く仕掛けがどこにあるはず……。

「ここなのだ」

そういつてイルマは、軽く扉に手をかけた。

「え？」

扉は、音もなく軽やかに内側へ開いた。桃矢を迎えるかのように闇が口を開ける。

どうやってあの重さを打ち消したんだろう？ 桃矢は不思議に思つた。

桃矢の疑問を置いてきぼりに、無警戒で入つていいくイルマ。

「さあ、入るのだ」

「おじゃまします」

つられて足を踏み入れる桃矢。入つたは良いが、見えるのは桃矢の四方、数メートルの床だけ。

細くて長い通路を歩いていく。皮膚感覚や音の反響具合で、そこそこ広い空間らしい事だけは解る。

やがて前方に柱が現れ、通路は行き止まりとなる。

「ちょっと乱暴であるが、……これを見るがよい」
イルマが懐から取り出したのは、不格好な拳銃。
彼女は特に目標も決めず、仰角四十五度で弾を打ち出した。
上空で白色光が爆発する。
照明弾だった。

ここは、巨大な空間。ドーム球場を何個も立体的に積み重ねた広さだ。

「な、なんだ？」

目前の柱は、空間の中央で天と地を繋ぐ巨大な円柱だった。
正面左に浮かび上がったのは、赤い女神の巨大な座像。
正面右に写ったのは、鎧に覆われた黒い鯨の巨像。

「なによ、これ？」

左後ろに影を落としているのは、鱗に覆われた青い巨木。
右後ろの小さな白い影は、長毛に覆われた四つ足の獣。

桃矢と桃果は、ドーム中央の柱まで伸びた、細長い渡り廊下状の通路に立っていたのだ。

「クシオ様配下に五神あり。

炎の女神にして戦の神、全てを否定する赤のファム・ブレイドウ
様。

水の神にして癒しの神、全てを肯定する黒のブレハート・ドノビ
様。

木の女神にして生けるものを育てる神、全てに力を与える青のヴィーム・マクス様。

鉄の神にして実りと収穫を約束する神、全てに変化をもたらす白のファール・ブレイドウ様。

そして、大地の神にして巨大な船、物言わぬ黄色のタミアーラ様。この五柱がタミアーラと共にゼクトール島へ降臨なされ、いまもどこかで確實に眠つておられるのだ

胸に手を当て目を閉じて祈るイルマ。神と神にまつわるコトバを口にした神職者は、神聖な何かに祈るもの。

大事な話なのだろう。……聞いてる桃矢にとっては、ただの長セリフに過ぎないが。

やがて、照明弾は地に落ち、消えてしまった。周囲は前にも増して闇に包まれる。

目で判別できるのは、小さなランタンの光が届く範囲。テラスの先端。小さな構造物から、ジョイステックのよつた突起が一つ出ていた。

周囲の巨像から考えて、……無理やり考えて、蛇を模したと思われる。

桃矢の腰あたりの高さから生えている蛇は、四十五度に伸びて、桃矢の喉元あたりの高さで大きく口を開けている。

明かりに不自由する中、目をこらしてみると、蛇像の口に埋め込まれた、水晶らしき透明な半球体が見て取れた。

イルマの説明が続く。

「陰の儀式は、王位を認めるもの。そして陽の儀式は国民に報告するもの。つまり、陰の儀式こそ、即位式の本分であると言えるのだ」

手にしたランタンを蛇型構造物の脇に置き、振り向くイルマ。逆光になつたので、イルマの顔がよく見えない。二人いた女官も、いつの間にかいなくなつていた。

桃矢は、誰かが寝をのむ音を近くで聞いた。いや、自分の喉から聞こえた音だつた。

桃矢だけではない。桃果やミウラまでが緊張していた。

「これから行う儀式こそが陰の儀式。要は、これさえ無事に済ませば、事実上、トーヤ殿は王の地位を得たことになる。晴れて陛下なのだ」
くだけた口調のイルマ。軽い空気感に、ちよつとだけ気が楽になる桃矢。

イルマが笑つた。

イルマは、桃矢達の緊張を考えて、わざと言つてゐるのか？ だとすれば……桃矢はイルマを子供扱いしない方がいいのかも知れないと思つた。

「これより、ヌル教に伝わる王位承認の秘術を執り行うのだ」
イルマは両手の指を広げ天に伸ばし、高らかに宣言した。

「あ、あの、イルマ様。わたしはここにいながよろしいのでは？」

ミウラが、おずおずと申し出た。秘術という言葉がミウラに遠慮させたのだ。……興味津々の桃果は、全く遠慮してないが。
「よい。たまには政府関係者が立会つても神罰は下るまい。……それにジエベルはどうも苦手なのだ」

最後は「ゴニヨ」「ゴニヨ」と小さく誤魔化してしまひながらも、何やら

袖の下で印を組んでいるイルマ。もう即位の式は始まっている。

「「」の「」時世。国防委員長の「」ウラが立ち会つのは、相應しいかも
しれないのだ」

イルマは意味ありげにニヤリと笑つて祈りの言葉を詠唱しだした。
桃矢が聞いたことのない言葉だ。やたら短いセクションで区切る、
珍しい言語だった。

「あれがゼクトール語ですか？」

隣で頭を下げてゐるミウラに、桃矢が小声で聞いた。

「あれは古代ゼクトール語と言つべき真ゼクトール語です。大昔、
この半島に王宮があつたのです。王がここに住んでいたときはこの
言葉で会話していたそうです。何代目かの王が、ここを離れたとき、
同時にこの言葉も失つたと聞き及んでいます。今、真ゼクトール語
を話せるのはイルマ様方、ゼクトーラ一族だけなのです」

「そこ、つるせこぞ！」

イルマが指さして桃矢達を注意する。

「申し訳ありません！ 甘んじて処罰を受け取ります！」

ホルスターから抜いた拳銃を自分のこめかみに当てるミウラ。

桃矢は、慌てて取り押さえた。組み付いた身体の下で、ブニュン
つと柔らかい感触が……。

さりに慌てて飛び退く桃矢であつた。

11・アンダー・ザ・グラウンド（後書き）

次回、「光に向かって！」

なんとなくフラグ的な副題。。

12・光に向かつてダッシュだ！

「まあ、よい。所詮は儀式。意味のないつまらぬもの。これより本番。トーヤ殿！」

クイクイと手を上下させ、赤ら顔の桃矢を呼ぶイルマ。呼ばれるまま進み出た桃矢は、イルマの指示で蛇像の前に立たされた。

九十度に開かれた蛇の口から見える水晶が、黄色いランタンの光を吸収したのか、淡く底光りしていた。

「その玉は『神の目』と呼ばれているものでな。こんな事、予の立場で言つてはならぬのだろうが……」

声の音量とトーンを一つずつ落としていくイルマ。

「おそらく、なんらかの蓄光物質が仕込まれておるはずなのだ。予も見たことはないのだが、伝承では赤く光るらしいのだ」「まさに種のない奇跡はない。神官長が一番解つている。種を知るものが詐欺師というが、はたして、そんなんでいいのかと思い、桃矢は苦笑いした。

「後は、トーヤが自分の名前を言つてから覗き込むのだ。そのあと、一通りの説教を垂れてお終い。早く済ませるのだ」

自分の仕事はもう終わり、とばかりに肩を揉みほぐしながら桃矢を急がせる。厳かなムードなどありはしない。

なんだか、想像していた即位式と違うなあと思う桃矢。

歩くのも苦労する豪奢な礼服とカーペットのようなマントを羽織つて、年老いた神官から刀を肩に当たられる。そんなヨーロッパ様式から遠く離れた、ちょ一簡素な儀式。

「文化圏と価値観の違いなのだ」「イルマは平然と言い放つ。

やれやれとばかりに、桃矢はのぞき込む。赤く光ればそれでオッケイ！

「えーと、芦原桃矢です。よろしくお願ひします」「あとは赤く光れば……赤く……。

「あのあ……青く光つたんだすけど?」

恐る恐る振り向く桃矢。イルマにお伺いを立てる。

「むう? 青くとな?」

背伸びして水晶玉を覗き込むイルマ。しかし、背が届かない。仕方なくイルマの脇に手を添え、抱っこしてあげる桃矢。柔らかい手応えと暖かい体温。イルマは、見た目以上に軽かつた。

「確かに青いな? うむ、予の聞き間違いであつたか?」「足をプラプラさせたまま、腕を組んで首をかしげるイルマ。

「まあ誰にでも聞き間違いはあるわ」

桃矢は軽く言つただけだが、イルマのプライドを引っ搔くには充分な棘があつたようだ。

「トーヤよ、いつまで予を抱っこしておるの? 早く下ろすのだ!」

「あ、ごめんなさい!」

慌ててイルマを下ろす桃矢。

「あらら、桃矢君、年下趣味だったの? 」

こんな場所でも突っ込む事を忘れない桃果。さっそくイタチ目をして桃矢をからかう。

その尻馬にイルマが乗った。

「未成年に手を出すと後がうるさ」

遠くの方で音がした。空気が漏れる時の圧搾音に似ている。

「ここは神像が眠る巨大な闇の空間。圧倒的な空域感覚に、四人は固まつた。

「た、たぶん、地上でコンプレッサーを動かしたんじゃないかな？」桃矢が、推理を披露した。紙のような薄っぺらい笑顔を貼り付けて。だって、ここは巨大な四神像しかないじゃないか。

「コンプレッサーと神殿って、なんだか関係遠くない？」

桃果が一刀両断で否定した。

そして、否定した本人が、一番後悔した。

蛇神像の影が、ランプの光に揺れている。陰影がはつきりしない石像は、どこか神秘的。

「ま、まあ、これで無事儀式も済んだことです……」

ミウラがホルスターを押さえながら出口を指さす。

「早く地下神殿を出ま

「

四人とも、音になり損ねた音を聞いた。一番近い表現をすると耳鳴り。

桃矢は青い顔をしている。

桃果は、誰もいないはずの後ろを激しく何度も振り向いている。

ミウラはホルスターから拳銃を引き抜いて、安全装置に指をかけていた。

イルマは平然とした風情で腕を組んでいるが、顔面からダラダラと汗を流している。

「そりじゃな、あまり長いとジエベルに怒られるかもしれないのだ」
どこか子供っぽいイルマ。しかし、だれもそんな事、気にしていなかつた。

「あれ？ この部屋、こんなに明るかつたっけ？」

桃矢が天井を見てボケッと呟いた。部屋全体が青白い。

照明弾でしか見えなかつた四神像のシリエットが、青白く厳かに浮かび上がつていた。

ランタンの光源は黄色かつたはず。青い光と言えば……。

ゆつくりと、四対八個の目が、水晶球に集まる。
そいつは、わつきより青い光を増していた。

桃果が、出口に向かつて、いきなりダッシュした！ 続いてイルマが逃げた。桃矢の背を押しながらミウラが走る。
みんな黙々と走つていた。

喋るためのエネルギーすら脚力に回して走つていたのだった。

12・光に向かってダッシュだ！（後書き）

次回「昔々」

以後、すこし間、開いてしまいます。

息せき切つて、地下神殿より飛び出してきた四人。女官から差し出された水を、シンクロナイズして飲み干していた。

「何だつたんでしょうね？あれ

後ろを振り返る桃矢。門の向こうに連なる通路は、暗黒の口を開けていた。

「おそれらぐ、先王の遺産なのだ」

「どうも、イルマには何か心当たりがあるよつだ。」

「先王のゼブダが、神殿地下の空いた部屋に、なにやら機材類を持ち込んで工事していた時期があつたのだ」

「ふ、ふふん！幽霊の正体見たり枯れ尾花つてとこひね。そんなもんだと思つてたわ！」

一杯皿の「ツップを空にした桃果が、偉そうにふんぞり返つている。

みんなで逃げている最中、彼女の小さい背中は、遠ざかることはあつても近づくことはなかつた。あの上り坂での距離をあれだけのスピードを維持したまま走り続けた桃果。この華奢な体の何処に、あれだけのパワーがあつたのだろうか？

いやいや、まてよ。偉そうなこと言つてるが、あの部屋から一番先に逃げ出したのは桃果ではないか、と桃矢は思つたが、後が怖かつたので口には出せなかつた。

「何よその皿？」

あからさまに非難する桃果の威力に、小さくなる桃矢だった。

「どうせろくな事考えてなかつたんでしょう！ それより、先代の才豚さんはここへ何を運び込んでいたの？」

「豚ではなくゼブダなのだ。……あの者が商社に騙されて買い込んだ、大型の情報処理機器が設置されているのだ。島中にネットワークを張り巡らせるとほざいておつたのだ。結局、宮殿にスペースが無くて、神殿の空き部屋にしまい込んだのだ。どうせ、係の者が電源を入れて点検していたというのがオチなのだ」

皆、一様に肩の力を抜く。正体に予想がつけば何のことはない。

「所詮、タネのない奇跡はないのだ！」

堂々と言い放つイルマに三人の目が集まる。

お前が言うな！

六つの瞳がそう叫んでいたのだった。

「^{だい}大ヌル神^{しん}は、この世の全てを造りし巨神。しかし巨大すぎて、人類の世迷い^{だい}ことはお耳に届かぬ。よつて、自らの力を分け与えし神を作られた。世に散らばりし幾多の神は、全て大ヌル神の子。連中は、神とは呼ばれしも巨神とは呼ばれぬ」

ここには天井が高く、明るい建物の中。

教会だか祈祷所だか、……祈りを捧げる場所に違ひなかろうが、……まあそいつた所でイルマの即席説教会が開かれている。先ほど、地下神殿で執り行う予定だったアレだ。

「巨神が産み落とせし兄弟神達は、地球上へと散らばった。ある神

々はヨーロッパ半島へ、ある神々はアジアへ。アフリカ大陸、南北アメリカ大陸、オセアニア、そして日本へも。人々をよりよく導くために、数えきれぬほどの神々が散らばったのだ。我らの教典では、この世で神と敬われる存在は、全て元は同じ。全て同じ根源より生まれし者。宗教観のいさかいなど、無知な人間が起こした従兄弟同士の喧嘩なのだ。神々は、さぞや迷惑してあることであろう」

イルマの鼻の穴が膨らんだ。真理を知るものは常に偉そう。テストの正解を知ってる者は、確かに賢いからね、と桃矢は思った。

「で、たまたまゼクトールを担当なされたのが、クシオ様なのだ。地方の神様だからといって縮こまる必要はない。なにせ、四大宗教とは兄弟だから。どの神様に祈つても、最終的に大ヌル神に届くという寸法なのだ」

人差し指をピコピコさせて自慢するイルマ。桃矢は、何かに似ているなと思った。

……新しいゲーム機を買つてもらつて、友達に自慢する子供に似ている。

「神話つてのは、えてしてそういうしたものよ。で？ ゼクトール創世記の話はあるの？」

いつもの笑顔で先を促す桃矢。桃矢は知っている、桃果は投げやりなのだ。どうせ次は創世記の話だろう。早く話を進ませて、一刻も早く終つてほしい。そう考えている。

桃矢も同じ事を考えていたので、口をはさんだりはしなかつた。

「元来、人類は世界の頭上に存在した天界で住んでいたのだ。しかし、原初の人間達がドジを踏んだ結果、天界が壊滅的な被害を受けたのだ。追い出された人々が、天翔る帆船タミアーラに乗り組み、

クシオ様に導かれるまま地上に向かつた。クシオ様によつてタミアーラの船長兼水先案内人に指名されたのが、王家の始祖ゼクト神王。打ちのめされた人類が彷徨つこと幾年月。たどり着いたのがこのゼクトール島なのだ

「どうだ恐れ入つたか、とばかりに鼻の穴を膨らますイルマ。誰かと似ている。桃果だ。

「神に指名されたにしては、十年も彷徨つたのかよ？」

「醜い権力闘争が目に浮かぶわ」

桃矢と桃果のひそひそ話が始まつた。

「リングの話とノアの箱船伝説が混じつてるわね？」

「スサノオが高天原を追放になつた話も混じつてるよ

桃矢は桃果より、その辺の話に詳しい。

神の話をしたイルマは、胸に手を当て目を閉じて祈る。堂にいた神官長だった。

「そのあとも、ゼクト神王を慕つた者共が、いろんな土地から小舟に乗つてやつてきた。神王は懐の深いお方。来る者は拒まずの姿勢なのだ。ゼクト神王の元、人々は新たな世界を築き上げたのだった。おしまい

イルマの話は終わつた。

ゼクトール島周辺は滅多に風も吹かず、海域は速い潮が囮つてゐる。周囲数千キロにわたつて島もない。十年に一度あるか無いかの暴風雨に遭遇せねば、遠方への移動は不可能。

それは、暴風に巻き込まれるという事故にあつた者で、小数点がつく生存確率を手にした強運の持ち主だけがゼクトール島へたどり着けたという意味。

そして、同じ確率を再び叩き出さねば、故郷へ帰れぬと言つこと。
いろんな肌の色と、いろんな目の色をした人種が混ざり合つたの
だろう。

例えば、外務委員長のサラは、どう見ても生粋の日本人にしか見
えない。

ジェベルはゲルマン系の血が濃そうだ。

財務委員長のマープルはネイティブアメリカンの血が混じつた、
明らかな混血だ。

そしてミウラに至つては……ミウラの顔と目の色はヨーロッパで
よく見るタイプ。そして髪がプラチナゴールド。だが、きめが細か
く浅黒い色をした肌はミクロネシア系。どの人種にも分類しにくい。
逆に複数の人種の特徴を持つている。

様々な肌と髪と目の色が混ざり合つた結果。それがゼクトール人
の特徴。

様々な神が融合し、妥協し合つた結果、今のゼクトール文化がで
きあがつたのだろう。

桃矢はふと思つた。ミウラやマープル達の素材となる人種は想像
がつく。よく知つている人種だ。ところで、「青い肌」をしたイル
マはどんな混ざり方をしたのだろう？

ジェベルが儀式ばつて頭を下げる。

「さて、これで正式にバルギトル政権は終り、新たにウハウハ政権
が誕生いたしました」

「ちょっと待つて、ちょっと待つて！ ウハウハ政権てなに？」
ジェベルが話した言葉の一部に納得いかず、食らいつく桃矢。

「恐れ多くも前国王陛下の正式名は、ゼブダ・バルギトル・ゼクト

ール。ちなみにミドルネームは母方の姓です。そして、トーヤ陛下の祖祖母様は、キリア・ウハウハ・ゼクトーラ様。名家ウハウハ家の姫様です。よってこれから陛下は、トーヤ・ウハウハ・アシハラ・ゼクトールと名乗っていただく事になります。ちなみに、ウハウハとは日本語で『節度ある人』という意味です』

見つめ合う瞳と瞳。桃矢とジエベル、一人の目である。もつとも、片方は点田であるが。

「なるほど、それでウハウハ政権と！ 韶きと意味がとてもよろしくてよ」

そう言つた後、桃果は笑いすぎて呼吸困難に陥つたのだった。

13・昔々の事じやつた。（後書き）

次回「虚弱体质」

感想、募集中～ お気軽〜。

「トーヤ陛下！ 乗り物を用意いたしました。国王即位のお披露目までの間に、ゼクトール各主要施設の観光案内をいたします。どうかお楽しみ下さい」

ジョベルは、レイバンのサングラスをかけ、指先を切つたグローブをはめて立っていた。彼女が用意し、眼前に引き出されてきた乗り物は！

……マウンテンバイクシクルだった。

「ちよつと、ジョベルさん！ なんで自転車漕がなきやならないのよー車はどうしたのよ、車は？」

前傾姿勢でＭＢを漕ぐ桃矢。これが三度目の愚痴だ。

四人は白い砂が堅く敷き詰められた道を走っている。さほど広くもなく、さりとて狭くもなく、サイクリングには適度な道幅。左右に茂る椰子の森が、日本にない景色だ。

「ほとんどの道は、珊瑚の白い砂でできた未舗装路です。しかも道幅が狭く、大型車の乗り入れはできません。それに十分と走らないうちに、たいていの目的地へ着いてしまいます。ゼクトールで一番使い勝手のよい乗り物は、自転車なのです」

先頭を切つて走るのはミウラ。道案内を兼ねた露払いである。その後ろをジョベルと桃矢が並んで走っている。桃矢は国王なのに最後尾だった。

しかし、この位置は神の手による配置。

サドルで揺れるミウラの引き締まつたヒップ。そしてジンベルの肉感的なヒップ。

それも水着。

黒の小さな布地に包まれた柔らかそうで温かそうなナードリーズミカルに、左右に分割して動く。

サドルが、桃型のお尻を持ち上げて、また、お尻の弾力が押し返して……。あ、あの皺はなぜできるんだろう？

神様。ゼクトールの神様。名前忘れちゃったけど……あ、思い出した。クシオ様！ 僕はあなたに宗旨替えいたします。どうか、このまま目的地に永遠に着きませんように！

「それは無理」

どこからか聞こえてきた声にハッとする桃矢。これは空耳か？

だが、どんなものにも必ず終わりがくる。でなければ、新しいことは何も起こらない。

やがて、巨大な建造物が姿を現した。

桃矢の願いも虚しく、クシオ様のパワーが衰退していく。ミウラがブレーキをかけて減速したのだ。

力一杯手を振っている人がいた。青白ボーダーの水着を着た女子。見覚えがある。長く垂らした三つ編み。元気いっぱい、農務委員長ノア・モフモフだ。

「これから」案内させていただくエリアは、我が国の最重要防衛指定施設です」

「ここが目的地だった。目的地に着いてしまったのだ！」

ノアが束ねる農務委員会は、国内の経済を一手に引き受けた組織でもある。エネルギー政策も、農務委員会の仕事の一環らしい。ノアはエネルギー担当も兼ねていた。

「ゼクトールが誇る、国立中央基幹発電所です！」

ノアが説明したとおり、どう見ても発電施設である。さつきから桃矢と桃果は、口を開けて見上げていた。

巨大なプロペラを頂に持つ、長大な塔がただつ広い草原に一基。風切り音とギア音がやたら大きい。黎明期の一品だ。

「風力発電……ですか？」

「ゼクトールは海拔が低い島です。地球温暖化には神経を尖らせています。これは、いわゆる工口発電。炭酸ガス排出量ゼロです！」

それはそうなんだが、何か抜けてないか？ 桃矢は激しく疑問を抱く。

「確かに、ゼクトールって朝と夕方しか風の吹かない島だったわね？ しかも微風」

桃果がボソリと呟く。神殿がある岬の高台で、ミウラから受けたガイド内容だ。

……それだつ！

「さつきから見てるんだけど……羽がピクリとも動かないんだけど……発電してるの？」

「ずっと上空を見上げたままの桃果。

彼女の眉間に皺が寄っている。真剣に心配しているのだ。……この国を。

「不足する電力は、あの副発電所に設置されたディーゼル式発電機でまかなっています」

「いや、それエコじゃないから！」

「むしろ、そこが中央発電所ですから！」

桃矢と桃果が真剣に突っ込んだ。

「いえ、でも、京都議定書に沿つて気持ちだけでも大切だと思うんです。だつて地球温暖化で海面が上昇したら、珊瑚礁でできたゼクトールは海に沈んじゃうんですよ。これ以上、石化燃料を燃やして二酸化炭素を増やしたくないじゃないですか！」

ノアの真面目な気持ちだけは汲めるが、汲んだからといって発電量は増えない。

「で？ 誰がこんなガラクタ買ったの？」

桃果はノアに容赦なく詰め寄る。対して、後ろ向きに下がるノア。「誰に騙されたの？」

大股で詰め寄る桃果。ノアの背中が風車塔に当たる。これ以上さがれない。

「ぜ、前国王が……、日本の四ツ字商事から……」

「うわっ！ 日本の商社に騙されたんだよお！」「めんよおみんなーつ！」

頭を抱える桃矢。

「騙されるというか……普通、何十基つて建てるでしょうに！ 羽が一日中回転したところで、一基だけじゃ大した電力を作れないのでしょ？」

「え！ それは本当ですか？」

桃果の言葉に驚く、エネルギー担当委員長のノア。桃果も桃矢にならつて頭を抱えた。

一人はゼクトールが……。国家として心より心配だった。

「次はどうよ！ 次は？」

立ち漕ぎでマウンテンバイクを駆る桃果。やけくその体である。

「次の視察予定部署は空軍です！」

スタンディングで抜重し、ギャップを華麗に飛び越えるミウラ。ジエベルは準備があると言つて先に王宮へ帰つていた。……逃げたのかもしれない。

「事前説明いたします」

先頭でお尻を突き上げ、マウンテンバイクを漕ぐミウラ。後ろを走る桃矢と桃果を振り返りながらの説明が始まった。

「ちょうど編隊飛行訓練が行われている時間です。急げば飛行中の視察に間に合います」

「まさかマスクコットチームがミグって言つだけのプロペラ機じゃないでしょうね？」

桃果のチェックが入る。軍視察の移動に自転車を使つていいのだ。期待はすまい。

「ジヒット戦闘機です！ 中古で購入しましたが、れつきとしたミグ戦闘機です。予算や空軍の規模といった観点から、三機しか運用できませんが！」

反論するミウラ。足に力が入ったのだらう。少しずつスピードが上がつていいく。

「三個小隊分は欲しいところだけ……まさか鎧が浮いたミグじゃ

ないでしょ？

あきらかに桃矢より時間あたりペダル漕ぎ回転数を上げる桃果。

声が大きい。

ミウラも負けずに声を張り上げる

「炎の女神ファム・ブレイドウ様を模して、赤く塗られた鎧一つな
い機体です。ちなみにチームのコードネームは『赤い三連星』と申
します」

「おしいつ！ けど真逆！ そしてビジュアルが心配！」

緩やかな丘を下る白い珊瑚でできた道。ミウラと桃果は並んで突
っ走っていく。

二人は、桃矢をブツチギリにして走つていった。

こここの神様は虚弱体質なんじゃなかろうか？ と、頭を捻る桃矢
であった。

14・虚弱体質神（後書き）

次話「最新鋭戦闘機！」

お話が切り替わります。

「確かにミグね」

息を切らしながら桃矢が空港にたどり着いたとき、桃果が空を睨んで唸っていた。

ここは今朝降りた空港だった。たつた一つの空港は空軍基地と兼ねているようだ。

近づいてくる金属音に気付く桃矢。南国特有の強烈な日差しを手で遮りながら、青く澄み切った空を見上げる。

轟音と共に頭上を飛び去る三機編成の赤い機体。

「あ、僕あれ知ってる！ 見たことある！ 古い映画に出でた！」

それは、ジェット開発初期の戦闘機。

単発のジェット機関に、直でブーメラン型の翼を取り付けたスタイル。ビジュアル的に言えば、翼の生えた鯉のぼり。

「ミグ17。ベトナム戦争で活躍した戦闘機。ジェットエンジン黎明期の機体よ。よくもまあ、こんな骨董品があつたものね？ 空を飛べる地球最後の三機じやなくて？」

見た目以上に静かな桃果。何かをぐつと堪えているようだ。

「でもさ、性能じゃなくて腕が一番だよ。模擬演習でイーグルを撃ち落としたファンтом乗りもいるって話だし」

性格なのだろうが、桃矢は無意識にゼクトール空軍を擁護する。

「ほり見て、みんなすごい腕だよー」二機ともワイヤーで繋がっているかのように左へターンして……あ、一機遅れて……ものすごい

遠回りしている

なんだか見えてるのが怖くなつて、目を反らやうとしたけど、反らした先にはもっと怖い顔をした桃果がこっちを睨んでいたので、元に戻した。

「着陸態勢に入りました」
ミウラが空を指さす。

見ると、一機が高度を下げて滑走路に進入してきている。

さつきの編隊飛行を見た桃矢と桃果は、無口になつていて。
無意識にミグの、ひいてはパイロットの無事を祈つていていたのだ。

着陸態勢に入つたミグは、滑走路の「ンクリ」すれすれ、機首をわずかに持ち上げ、後輪から接地する。

ズンズンと滑走路を進んでいくミグ。滑走路を全部使つつもりなのだろうが、滑走路の端っこまで来て……一機体分オーバーランして止まつた。

すぐさま、地上クルーが駆けつけ、滑走路よりミグを退去。心なしか慌てているように見えるのは、すでに二番機が滑走路への進入行動を開始してからかもしれない。

手に汗握る桃矢と桃果。生命の危機を感じて息を詰めている。

二機目も無事接地。摩擦熱でタイヤから黒煙が吹き出す。二十メートルもオーバーランして停止。フェンスのない空港が幸いした。

三機目が下降していた。フラップフルダウソ、タイヤも出ている。
まだ二機目が滑走路から片づいてないのに！ しかも、左ターンに

失敗して大きく旋回していた機体だ。

管制塔はこの機にナニを指示しているのか？ 赤い三連星の機体は無線を積んでいないのか？ 地上クルーは間に合つのか？ 未熟な者から着陸というセオリーは無視か？

ものすごい音がして後輪が接地した。バーストしなかつたのが不思議なくらい。しかし、なかなか前輪が接地しない。桃矢と桃果の噛みしめた歯茎に力が入る。無限に続くような数秒が過ぎ、倒れ込むようにしてやっと前輪が接地した。かなり距離を消費して。滑走路に一番機はない。地上クルーが間に合つた！

「このクルー、ハンパねえ！ チヨーすげえ！ 桃矢と桃果、きつく拳を握っている。

三号機は、すでに空港とは言えない荒れ地で無事、翼を休めていた。

ゼクトール空軍機、全機着陸完了！

「ほおーうう！」

長い溜息が一人の口から漏れた。

「なんか、……なんか、こう、長い映画を一本見たような気持ちになつてる」

桃矢が汗を拭つたのは、真昼の太陽のせいばかりではない。さすがの桃果にも疲れが見えた。背中が丸い。

「トーヤ陛下、若鷹達を紹介いたしましょう」
ミウラが手を広げて、赤い三連星チームを迎える。

エンジ色のスーツをまとつた者が三人、コンクリで歪む大気の向こう側から、こちらへ走つてくるのが見えた。

パイロットスーツといつより、身体のラインが浮き出した革のライダースーツ。小脇に抱えたヘルメットは、どう見ても日本製オフロードバイク用。近代的な装備にはとても見えない。

「小隊隊長のノイエ・コンチエル少尉、十五才です！」

「副隊長のタマキ・ファタジー准尉、十四才です！」

「隊員のグレース・シンフォ曹長、十三才です！」

揃つて敬礼した。やっぱり女の子だった。

みんな元気だ。とにかく元気だ。そして明るい。笑顔が可愛い。胸が大きい。それ以外、彼女らに何を期待すればよいのか？

「まあ、そんな事だらうとは思つてたんだよな
腕を臍下で交差した丁稚立ちをしている桃矢。

「ちなみに、みなさん飛行時間はどのくらい？」

「こめかみを押さえながら桃果が聞いた。頭が痛いのは、遠くの空から聞こえる排気音のせいだけではない。

「ちょうど四十八時間です」

タンポポの様な笑顔を浮かべるノイエ少尉。平和だ。

「わたしは今まで三十時間になりますね」

「コニコニ顔のタマキ准尉。楽しそうだ。

「わたしはまだ十八時間です。一人の足元には及びませんですう

」

「ベソをかくグレース曹長。もつぢうフォローして良いのかわからぬい。

ノイエがグレースの肩を優しく抱く。

「そんなことないわグレース。たつた三十時間の差よ。一日じょうじじゃない！」

タマキもグレースの肩に手を置いた。

「わたしとは十二時間差ね。ちょうど半日よー。」

一人の慰めに顔を上げるグレース。笑顔が戻っている。

「うん！ わたし頑張る！」

三人は堅く手を握りあつたのだった。

「だーあつ！」

両の拳を振り上げ、滑走路の端まで轟く雄叫びを上げる桃果。目が血走っていた。

「ちょっとそこの中学生！ よくもそんな危なげな飛行時間でジエットに」

桃果のシャウトは途中で遮られる事となる。

ゼクトール空軍基地兼、国際空港上空に、爆音が轟いた。

桃矢は雷雲を探していた。何の音かと聞かれれば、雷と答えたろう。だが違う。雷鳴なら一瞬である。雷鳴はこれほど長く続かない。大気を破壊する音なのか？

尖った機首。コクピット下から主翼へ、流れるように張り出したスカート。背の高い一枚の垂直尾翼が特徴的な大型戦闘機。

「あれはフランカー！」

桃果が叫ぶ。

「ケティム海軍マーク確認！」

次いでミウラが叫ぶのと、最新鋭戦闘機が空軍基地上空を通過するのとが一緒だった。

ブルーグレーに迷彩塗装された三機のフランカーは、二基装備されたエンジンのノズルから薄黒色の排気ガスを散らし、北へ九十度ターン。当然、一機も編隊を乱さない。

さらに左へ九十度ターンし、元来た方向、西の空へと消えていった。

防空サイレンが鳴り響いたのは、姿形、そしてエンジン音までが消え去った後だった。

15・襲撃！ 新鋭戦闘機！（後書き）

次話「ミコ－イ島」

戦争です。

「洗いざらりこ白状なさい！」

王国会議室に桃矢の怒声が轟いた。居並ぶ委員長達は、三名を除いて、うなだれたまま自席に座っている。

自分の性格じゃねえ、とばかりに窓の外を向いているエレカと、何を考えているのかどこに焦点を合わせているのかわからぬミラ。そして、拳を固く握りしめ、真正面の壁を睨み付けているミウラの三名を除いて。

何がある。彼女たちは、致命的な何かを隠している。桃矢はそう思つた。そしてそれは、ゼクトールの領空を簡単に侵した三機の新鋭戦闘機に關係ある。戦闘機が絡む以上、生暖かい部類の問題ではないはずだと。

青い顔をしたミウラが口を開いた。

「実は……、我がゼクトールは……」

「わたくしがお話しいたします」

ミウラの言葉を遮つてジェベルが席を立つ。

ニコニコした顔のままだ。

「トーヤ陛下のお役目は、予定通りもつすぐ終わります。終われば、あとは、我々の問題です。お一方にはなんの関係もございません」
ジーベルの笑顔はいつもの笑顔。髪の毛ほどの隙もない。だけど無理をしている。

「緊急事態とはいえ、強引な手法でトーヤ陛下を親御様の元からゼ

クトールへお連れしてしまいましたが、それも、すぐにお返しすることが大前提。その条件があればこそ、日本政府と親御様の了承を得られたのです。トーヤ陛下と桃果様お二人は、予定通り明日日本へ帰国していただきます。それが我々の……いえ、わたしの書いた筋書きです。申し訳ありませんでした」

全ては自分の責任だと、深々と頭を下げるジェベル。残り八人の委員長も頭を下げた。

「そんなこと聞いてるんじゃないわよー」

一つの拳でテーブルを叩きつける桃果。眉が危険な角度に上り上がっている。このモードへ移項した桃果は手がつけられない。桃矢の十七年にわたる経験から得た知識である。

「桃果ちゃん、そんなふうに怒らなくても。皆には皆の事情つてものがあるんだろ？」

「バカ桃矢！だからあんたはお人好しつて言われるのよー」

怒りがこちらに向いた。お人好しと言われて平然としているほど桃矢はお人好しではない。しかし、逆らうのは愚作。桃矢は両手を挙げて降参のポーズを取る。

「あれは、威力偵察よ！違う？ フランカーはイーグルを凌駕する格闘性能を持ちながら異常なまでの航続距離を有しているわ。だけど、いくら超長距離を飛べるからって、ケティム本国からじやさすがに燃料が持たない。なのに姿を現した。ってことは近くに滑走路がなくちゃいけないの！ つまり

ぐるりとみんなの顔を見回す桃果。

「空母が近くの海にいるって事！」

各委員長の顔色が日に見えて寒色系へと変化した。

「空母一隻で軍事行動はできないわ。艦載機を飛ばして偵察行動に出たつてことは、ケティムは既に防空駆逐艦やフリゲートを含んだ艦隊を展開し終わつているのよー」

規模はわからないが、ケティム海軍は、ゼクトールの領海付近で艦隊行動を取つてゐる。そして、真つ昼間から堂々と領空を侵犯してみせた。これは挑発行為に他ならない。

しかも、前国王の死後まもなく、新国王即位式当日の確信犯。最悪の挑発行為である。

政府首脳部は冷静に対処できたとしても、一般民衆の心理面はそうはいかないだろう。

敵の狙いは正しくそれと容易に推測できる。

現にゼクトール軍は対処できなかつた。それは国民にゼクトール空軍力の、そして防衛力のなさを知らしめすのに充分なデモンストレーションである。

「ケティムとの間に何が？ なぜゼクトールのような、何もない国が狙われるの？」

桃果の眉は上がりっぱなし。いまにもジエベルに掴みかからんとする勢いだ。

ジエベルの顔から笑みが消えている。わずかに目が伏せられた。

「あたしはゼクトールが好きなの！ あなた達のお父さんやお兄さんが好きなの！ 出稼ぎに出てゐる男達に変わつて、必死で国を切り盛りしている女性が好きなの！ だからお願ひ、あたしにも教えて！」

桃果の眉が下がつた。背中も丸くなつた。

そういえば……、親の離婚という一件もあり、桃果は大家族的な

この国の氣質を氣に入っていたつ。桃矢は桃果に感情移入していた。

「国王として何も知りませんでした、では通らないよね？」
桃矢もジエベルに理由をたずねた。

「知らないまま、観光気分で帰国していただければ、と一回考えておりましたが……やはり、お話しなければなりませんか」
溜息一つ。ジエベルは席を離れ、壁に貼られたゼクトールの地図に歩み寄る。

「神殿をご案内させていただいたとき、遠くにミラーイ島を」」覧になられたでしょ？」

「ああ、あの変な形した無人島？」

頭の中に画像を再生する桃矢。綺麗といつ言葉では表現できない海の色と、黒い直角三角形の島が脳裏に浮かんだ。

「最近、ミラーイ島の沖合で、大規模な海底油田が発見されました。当然、ゼクトールの経済水域内です」
壁に貼られた地図の一点を指し示すジエベル。

「中東の油田に匹敵する埋蔵量が予想されるそうです。この油田が開発されれば、石油枯渇問題を五十年は先送りできるそうです」
「だから岬に立つたとき、オイル臭がしたのか」

桃矢は、綺麗な海にそぐわない匂いを鼻の中に再生する。

「いいじゃないそれ！」

無邪気に喜ぶ桃果。石油が採れる国は例外なく金満国だ。貧乏国ゼクトールも、これで一躍大金持ちになれる。全ての問題が片付くはずだ。

桃矢も桃果のように手放しで喜びたいところだが、そうはいかないらしい。ジエベル達の顔を見ていると、胸中に不安感が広がっていく。

「それ自体は喜ばしいことですが、問題が三つばかり」
「まさか？」

桃果が嫌そうな声を出す。桃矢もだいたい想像がついた。

「一つは、油田を発見したのが、何故か遠い異国ケティムである」と

また面倒な……。それだけで桃矢は、頭が痛くなつてきた。

「二つめは、ケティムが……ミヨーイ島のケティム所属権を主張してきました」

「なにそれ？」

桃果、本日一回目のテーブル叩きであった。

次回「三つ田」

引き続き感想、お便り募集中！

「第二次世界大戦前まで、ゼクトールは国際世界と交流がなかつたんじよ？ この海域は経済的にも地理的にも利用価値がなかつたから、訪れる人も無かつたんじよ？ 諸外国がゼクトールを知らなかつたんだから、領土問題なんて発生するはずないでしょ？」

三回、四回とテーブルを叩きつける桃果。彼女の怒りはごもつとも。だがテーブルに罪はない。壊れてしまえば修理に国税が使われる。今の時期、それは避けたい。

桃矢は桃果の腕を押さえた。

「国連とか、公の場に出さなかつたんですか？ 誰が見ても無茶な話です」

理不尽。それは桃矢の一番嫌いな言葉。

「ケティムの方から国連総会に持ち出しあがつた。なんでも、ケティムが持つ昔の文書に、ミヨーイ島の所有権を当時の国王から譲つてもらつたとする一文があつたらしいぜ！」

後頭部で腕を組みながら足をテーブルにのせているエレカが、投げやりに話す。口元に小馬鹿にしたような笑みを浮かべていた。もちろん、バカにする相手はケティム古文書だ。

「なつ！ それなに？ 國際社会でそんな子供だましが通じると思つてるわけ？」

桃矢に押さえられた腕でもがく桃果。確かに馬鹿な話だ。

「ところが、お偉い大国の方々は『それを否定する材料がない』として、反対しなかつた」

自虐的な笑いに変わるエレカ。

「結局、採決が取られたんだが、石油と利権欲しさに田のくらんだ国の方が多いつたって事だな。ほとんどの国が、ニアーアイ島はケティムの固有領土だと認めやがつた」

「なによそれ？……わかつた！ 金ね？ 金で買われたのね？」

「巨額な賄賂事件よ！」

桃果を押しとどめられなくなるのは時間の問題だな、と桃矢は思つた。

ジェベルはゆっくりと首を縦に振り、続いてゆっくりと横に振つた。

「政治的関係、政治の取引、大国間の利害関係、国連及び各国議会でのロビー活動。そういういろいろなカードを沢山持つてるのがケティム共和国。対して、我らゼクトールは、国連より、小島嶼開発途上国に認定された小国。援助されることはあっても、こちらから差し出すカードなど一枚もございません。すでに」

言葉を切るジェベル。ある種の感情を鋼の力で抑えている様に見える。

「すでに、ケティムは、我らに無断で油田の試掘を始めているのです！」

珍しく熱のこもつたジェベルの説明に、力を込めて聞いている桃果。暴れる方向ではなく、内なる方向へ力を込めて。

「無理が通れば道理は引っ込むの？ 正義はどうしたの？」

血が出るくらいにきつく拳を握りしめる桃果。桃矢は、ここまで感情を露わにできる桃果が羨ましかつた。

桃矢の一歩先にある、ちょっとした自由。無難な生き方と引き替えに捨てた自由を桃果が持つていて。なんだかんだいって桃果に付

き合っている理由の一つがそれ。そんな自由の恩恵にあざかりたかったのだ。

「えてして、国際社会では、正義は力になりません。野蛮な力が正義になることが多いでしょう。愛するものがあるかぎり、人は他人に対してもどこまでも冷酷に、そして我が儘になれるもののです。かく言う我々もそう。生き延びるために他人様の血を流すことを厭いません」

ジェベルは元の宰相にもどっている。普段どうづつの言葉で普段どおりで話した。

「ゼクトールは主立った航路から外れていますし、経済的に深く繋がる国もありません。グローバルな視点で見れば、どうでもいい島なのでしょう。しかし、そんな島でも我らの祖国。何物にも代えられない故里なのです」

「故里。芦原家のある町で生まれ、育った桃矢にはピンと来ない言葉だった。

毎年、夏休みに母の実家へ遊びに行く。実家での母は、違った顔をする。故里とはそんなものだと思っている。でも、そこは母の故里であつて桃矢の故里ではない。

「まもなく国連で、ケティムの軍事行動について是非が取り上げられます。もちろん、ケティムから出た議題です。おそらく、ケティムの軍事行動は正当化されるでしょう。それからです、ケティムが行動に出るのは、もう少し先の話です」

ゼクトール人は皆、楽天的な性格の持ち主だ。ジェベルは笑みさえ浮かべていた。

「ゼクトールに乗り入れているたつた一つの航空会社は、明日を最

後に乗り入れを見合わせる旨、申し入れてきました。もともと利益率の低い路線です。近い将来、ゼクトール周辺での軍事行動が予期されるためでしょ。明日、午前の飛行機が最後です。その最後の便に、お二人のお席をとつております」

しんと静まりかえる執務室。心なしか、ジエベルの笑みが寂しそうだった。

桃矢も、桃果も声が出なかつた。いや、話す言葉が見あたらなかつたと言つべきか。

しかし、話せる議題が一つだけ残されていた。

「三つ目の問題は何ですか？」

桃矢が口を開く。問題は最後まで聞いておくものだ。

寂しそうな笑みを浮かべたジエベルが、第三の問題を口にした。「温暖化による水位の上昇です。このままで十数年後に、ゼクトールは比較的海拔の高い神殿半島の一部を残して、全て水没してしまいます」

「これこそ国家存亡の危機。じわじわと真綿で首を締め上げていく、緩やかな滅び。

「小さな海洋国家は全て、海面上昇に怯えています。一方、炭酸ガスの大排出量国である先進国は、効果的な削減策をとつてくれません。むしろ、迷惑がつていてる節が見られます。なぜでしょう？ 我々小さな島国よりも、大気と大地を汚す企業からの収益が大事なのでしょうか？」

「その、大量排出国の一つである日本から来た桃矢と桃果。桃矢は、彼女らに言つべき言葉がないことに気付いた。

「同じような問題を抱える小さな島国。特に海拔の低い国々と共闘

しましたが、それは別問題だとして棚上げを喰らいました
地球温暖化による水位の上昇。テレビの特番やニュースで見た映像が、桃矢の脳裏に浮かんできた。あの時は大して気にかけてなかつたけど。

「それはさておき、昼食の時間が大きくずれてしましましたね。ま

ずは腹」しりえと致しました「う

ジェベルが笑顔を浮かべる。つまくはぐらかされてしまった。

ジェベルは元通り、笑顔のジェベルに戻っていたのだった。

次回「エンスツ」

なるべく早くうつしたいと心がけます！

「トーヤ陛下。早速ですが、一つ案件を承認していただきたいのです」

「へ？」

やはり出てきたコッテリ味のスペaghettiを食べ終え、食後のココナツジュースを飲み干したときだった。ジエベルが申し訳なさそうな顔をして、桃矢に話を持ちかけてきた。

「国の政治を司る者達が入れ替わったように、ある一定以上の要職に就く担当者も入れ替わります。そこで」

ジエベルの合図で、外務委員長のサラがドアの向こうに手招きをした。現れたのは、黒髪の小さな少女。二カ所で束ねた長い髪を両脇に垂らしている。

「初めまして、トーヤ陛下。Hンスウ・シャオンです」

ペコリと頭を下げるHンスウ。ツインテールの長い髪がピヨコンと揺れる。黒目がちの大きい目ながら、オドオドとした瞳。顔つきといい体つきといい、まだまだ子供だ。

要職である証拠に、例の水着型制服を着ていた。

……水着が要職の証つてのもナーダが。

「Hンスウはわたしと同じ十三才です」

いつもたどたどしく喋るサラ。Hンスウと良いコンビだ。

桃矢は一人を微笑ましく思った。ちびこい一人が並んで立つていると、小学校の発表会のように見えたからだ。

サラによるエンスウの紹介が続く。

「エンスウのシャオン家は代々、わたしのプロプロ家に仕える家柄。ですが、わたしたちは親友です！」

小さい拳を握りしめ、頬を紅潮させているサラ。そのまま黙つている。

桃矢は理解した。サラが、これで解るだろ？と思つてゐるのを理解した。

「それで？」

そんなんで解るわけないので、より詳しい説明を促した。

「国連大使は、国王もしくは外務委員長が選定し、国王がそれを承認します！」

桃矢は、おそらく正解であろう？嫌な予感がした。嫌な予感と言つより、不安と言つた方が良いかも知れない。

「トーヤ陛下！ どうか、国連大使拝命の件、承認お願いします！」
エンスウが勢いよく頭を下げた。ぴょこんと飛びはねる髪の束に、桃矢の不安がいつそうかき立てられる。

「いや、あの……エンスウちゃん、十三才なんでしょ？」
「ゼクトールの法律では、十三才で成人とされております」
答えたのはジェベル。未成年就労防止法とかすっ飛ばす、にこやかな顔がなんか怖い。

「エンスウちゃん、経験あるの？」

「不足分は若さで補います！」

その若さはいかがなものだろ？

「エンスウちゃん、経験、ないんだ……。多分、国外に出たこともないんだろうな……。桃矢は不安を通り越し、逆に冷静になりつつあつた。

「危険……なんじゃない？」

これは、妹の一人旅を心配する兄の気分だろうなと桃矢は思った。「エンスウは俺のたつた一人の妹だ！　俺がついてるかぎり、誰にも指一本触れさせん！」

いつの間に入ってきたのか。エンスウによく似た顔立ちの少年が、泣きそうな顔をして立っていた。

「お兄ちゃん！」

「「」、「」兄妹ですか？　つーか、なんで兄じゃなくて妹が国連大使を？」

思考能力が低下してしまった桃矢。体に悪い方の汗が、頬に一筋流れている。

「彼は兄のパオロン。役職は大使付きの武官です。彼は十五才。あと一年もすれば海外へ出稼ぎに出でしまいます。そのような者に、国の要職は勤まりません」

相変わらずにこやかなジェベル。しかし、心の中は……。

それくらい桃矢にも解る。

「良くも悪くも、ケティムとの問題は短期間で終わる。俺が出稼ぎに出るまでには終わっている。だから、俺は……妹を……」

言葉が出て来なくなつたパオロン。あとは腕で「コシ」「コシ」と田の周りをこするだけ。

彼も、今のゼクトールを取り巻く焦臭い匂いを嗅いだ一人なのだ。

国連は第一の戦場になるであろう。いろんな力や不思議な取引が飛び交う魔界のような国連本部に、たつた一人の妹が向かおうとしている。

それを承認しようと叫ぶ。「泊一日の王として。

「でもちよつと……」

桃矢の心境はこうだ。わかるけどわかりたくない。

「桃矢！」

いきなり桃果が叫ぶ。

「へつ？」

驚いた桃矢。ろくな返事もできなかつた。

「『へ』じゃない！返事は『ハイ』でしょ？」

「ハイ！」

桃矢の返事に、にんまりと笑う桃果。

「『ハイ』は肯定の返事。桃矢陛下は承認なされました」

「桃果ちゃんずるい！」

思い切りの悪い桃矢の後を小気味よく押す桃果。小さい頃からのパターンだ。

「では、ここにサインを」

信任状下部の大きな空きスペースを指さすジエベル。手渡されたペンで、隅っこに小さく名前を書き込む桃矢。日本語で書いてしまつた。

「どうかご心配なく。国連大使の重責、このエンスウ・シャオロン、命をかけて全ういたします！」

目にいっぱい涙を浮かべ、唇を振るわすエンスウ。

どう受け取つていいのか、桃矢にはわからない。まさかとは思う

が、片道切符のつもりなんじゃなかろうか？

「心配するなって言われても……」

この状況。いろんな意味で、心配しない方がおかしい。

「万が一、ご期待に応えられなかつた場合は、国際連合本部ビルを枕に討ち死にしてみせましょう！」

上着を開いてみせるエンスウ。膨らんだ内ポケットから、導火線が顔を出していた。

「いやいやいや、それ駄目だから！」

手振りを混ぜて止めに入る桃矢。ひいたばかりの脂汗が、また流れ出した。

「よく言ったエンスウ！　その時はお前一人じゃない！　お兄ちゃんも一緒だぞ！」

エンスウの小さい手を両手で握るパオロン。彼の上着からも細長い紐が飛び出している。

「いや、だからそれは自爆テロ以外の何ものでもないって！」

桃矢は、この国の教育方針が心配になつてきていた。

「エンスウ、失敗は万が一にも許されません。でも万が一の時は、わたしもこの世にいないでしょう！」

エンスウとパオロンの手に、自分の手をかぶせるサラ。既に号泣している。

「まだその話題で引つ張るんですかい！」

もうどうにかしてほしかつた。どこかにいる水着の神様、どうかこの状況を改善してください。桃矢は祈つた。

しかし、負け癖のついた神に祈つても仕方ないので、まともな人物に頼る事にした。

ジーベルは、いや、ここに女の子達は、窓の外を見つめている。ラ以外、みんなもらい泣きしていた。ミカラも顔を伏せて肩を振るわせている。

桃果も顔を伏せて肩を振るわせていたが……「うちはたぶん笑っているはずだ。

もうどうしようもない。桃矢は力むのをやめた。みんなと同じ方向を向こうと決めた。

なにせ、幼馴染みがあの桃果なのだ。流されるのは得意だ。

「じゃあこうしよう。エンスウちゃん、全身全霊をもって任務に当たつてください」

桃矢の言葉に、直立不動の姿勢を取るサラとパオロン。一人は涙を無理に止めた。

エンスウだけ泣いていない。水っぽい目をしているが、泣いてない。泣いてはいけない人だからだ。

「頑張るだけ頑張つて、それでも駄目だつたら、その時はお兄ちゃんと一緒に戻つてくればいいから！」

桃矢はそんな風に声をかけた。

みるみる間に、エンスウの下まぶたに涙がたまる。

「絶対に死んではいけません。生きて帰つてきてください。これは命令！」

エンスウの左目から涙がこぼれた。右目からも涙がこぼれた。堰を切つて涙が流れ出す。

声は出さない。出したら泣いたことになるからだ。口をグニグニにして堪える。

上をむいて、歯を食いしばるだけ食いしばって、嗚咽を飲み込ん

だ。

次に顔を戻したとき、エンスウは笑っていた。マーガレットのよ
うな可憐な笑顔だった。

「トーヤ陛下、行つて参ります」

桃矢は返事をしなければならない。その言葉は一つしかなかつた。
「行つてらつしゃい。気をつけて」

直立不動で敬礼するエンスウ。そして部屋を出て行つた。

「なかなかの落とし方ね。ま、桃矢じゃこんなもんでしょう」

フォークをピゴピゴさせながら、優しく笑つている桃果。たしか
に、彼女の言つように、その場だけを切り取ると、大げさな一幕だ
った。

「ところで」

桃果は周囲を見渡した。

手に手にハンカチを持つて皿に当てている少女達。マープルを中
心にアムル、ノア、サラが互いの肩を抱いている。眼を真つ赤にし
たジムルは、必死に冷静さを装つていた。

エレカは「なんだよ！ いいヤツじゃねえか！」と盛んにブツブ
ツ言いながら、向こうを向いて肩を振るわせている。

ジエベルは嬉し泣きなのだろうか？ ハンカチを皿尻に当て、笑
顔で泣いている。

ミラは……ぼーっとした目で、こんどは空になつた皿を見ていた。
ミウラはきつく目をつぶり、エンスウに敬礼している。口元が微
妙に震えていた。

桃矢も目頭を押さえている。

「この温つぽい空氣をどうしてくれようか？」

桃果は、左手にスプーン、右手にフォークを持った両手をワナワナと震わせていたのだった。

18・エンスウ（後書き）

次回「居残り組と帰宅組」

生暖かく待て！

「なんか……」「……変な感じだよね。照れくさい」というか、出来レースといふか」

宮殿中庭に集まつて歓声を上げている国民に対し、王宮最上階に設けられたベランダより手を振り続ける桃矢である。……王宮最上階つていっても、宮殿自体が二階建てでしかないから、一階のベランダから手を振つているといった体である。

「かりにも、王として国民の声に答えなきや。いわゆるロイヤルデューティーってやつ?」

ゼクトールの女性は皆美しい。そして集まつた国民の九割方が女の子だった。

これだけの人数が、そろつて桃矢の名を叫んでいる。内、八割方が踊つている。

「桃矢、鼻の下、鼻の下!」

後方で桃果が笑つていた。

結局、ケティムの領空侵犯もあつて、パレードは中止された。代わつて、王宮でのお披露目となつたのだ。

桃矢の心中は穏やかでない。

新しい国王を無邪気に歓迎する国民。あんな出来事があつたにもかかわらず、ゼクトールの国民が大挙して集まつてきた。お祭り騒ぎだ。

しかし、桃矢は、いわば傭われ国王。新しい国政スタッフを承認するだけの役目。

あの後、国連大使のエンスウ以外も何名か、国の重要ポストに就

く少女達の着任を言われるがまま承認した。全てジエベルやミウラ、その他各部の委員長が選んだ少女達。

桃矢が自分の意思で選んだわけではない。

同年代の少女達が一様に眉を吊り上げ、暗い未来が待つてゐる戦いに進んでいく。その子達の背中を押す役目を桃矢が担う。そして桃矢は明日、ゼクトールを離れ、日本に帰る。国民はその事を知つてゐるのだろうか？ どうにも割り切れない余りが気になつてしまたなかつたのだった。

お祭り騒ぎは深夜にまで及んだ。

直接、床に座るゼクトール式晩餐会だった。
ゼクトールの郷土料理が大皿に盛られてだされた。

茹でたブレッドフルーツは栗に似て、とても甘い。椰子蜜をかけて食べるのだ。薄くスライスして油で揚げたポテチ風もなかなかいける。

熟したヤシの実をココナッツクリームで甘く煮たヤシリンゴは、桃果のお気に入りだ。怖いくらいに手を出している。

変わつたところで、カツオとマグロの刺身が出ていた。刺身と言つても日本風ではない。ココナッツクリームであえてある。

これがおいしい。コナツクリームと魚介類の相性は最高だ。

他にも、タピオカ芋のココナッツクリーム煮や、珊瑚礁で捕れた魚のフライ。ココヤシの実と焼き魚のあえもの。すべてが椰子の木絡みの料理。

南海の孤島ゼクトール。椰子の木が生えてさえいれば、一生食う

に困らない国。

そして、料理のメインは豚の丸焼き。これの存在感は大きい。

「コナツツ」を餌に育てられた豚は柔らかくて美味しかった。小手先の技で育てた自称高級豚など、コナツツ豚の足元にも及ばない。あんな豚とは種族が違う。

そんなこんなで、ゼクトール各地の有力者と挨拶を交わしながらの晩餐会だつた。

思った通り、有力者達は女の子ばかり。

幼女からロレ風お姉様まで、みな正装で集まつていた。正装とはもちろん、水着のことである。

和やかな晩餐会であつたが、どうにもまぶたが重い。拉致からこつち、桃矢はほとんど寝てない。

そんな桃矢の様子を見かねたジエベルが、早めに引き上げさせてくれたのだ。

勢いのないシャワーだけの風呂に入つて、ベッド潜り込んだのが、なぜか寝付けない。

ふと見ると、窓が大きく開いている。

桃矢は窓から外へ出てみた。靴は履いていない。裸足で歩くのは久しぶりだ。足の裏がチクチクと痛痒い。それがまた新鮮な感覚だった。

たいした警護などしていない王宮。誰の目にも触れることなく人々と外へ出られた。

宮殿を抜け出した桃矢は、裏の浜辺でしゃがみ込んでいた。ゼクトールは小さな島だ。どこからでもすぐに浜辺へ出られる。

ぶらぶらと、波打ち際を歩いてみた。濡れた砂は引き締まつて、結構歩きやすい。

昔はもっと遠くまで浜が続いていたとジョベルさんは言っていた。海面上昇で、海が迫っているのだ。

そんなこと関係無しに、寄せては返す波の音が心地よい。寄せては返し、返しては寄せる。

海が生まれた遠い過去から、永劫に続いてきた単純作業。

月は出ていなかつたが、足元は仄かに明るかつた。日本では、田舎ですら見られない、ものすごい星の量が照明になつていていたのだ。今にも音が聞こえてきそうな星空が、桃矢を異世界へ誘つ（いざな）っている。

遠くで鳴る爆竹の音が、桃矢を浮き世へと引き戻す。なんとなく銃声っぽく聞こえたが、たぶん気のせいだらう。

町の中心部から聞こえてくる音楽と歌声。お祭りの定番はどこの国も一緒だ。

戦争になるかもしないというのに、この明るさはなんだ？

明日はこの国を離れる。離れないとヤバイことになる。ここに来たのは自分の意思じゃない。むしろこちらが被害者だ。

だのに、なんのだらう、この罪悪感は？

自分がここにいたつて、なんの役にも立たないといつのこと。

人が一人、砂浜に立つていた。

夏の制服を着た少女。桃果だ。

背中まで伸びた長い髪。その湿度からみて、桃果もシャワーを使

つたのだろう。

桃矢に気付いた桃果が振り向く。

「夜になると、ちょっとは風が吹くみたいね。窓を開け放てば涼しく寝れそう

寝られないから外に出てきたのだろう。」

桃果は、桃矢から視線を外し、遠く夜空を見つめた。南国の星空を楽しんでいる。

「ほら、あれ南十字星じゃない？ あれ？ 大きいのと小さいのが一つあるけど、どっちが本物かしら？」

違和を感じる桃果の笑顔。唇の表情が嘘っぽかつた。

おしゃべりな彼女が、それつきり口をつぐんだままのがその証拠。

腹に何か持つている。だけど、決して自分から切り出さない。桃矢から話を始めなければならない、ということだ。

だけど、桃矢に、だつておしゃべりに興じたくない時もある。今夜のようだ、沈んだ気分の時がそうだ。口を真一文字に結んで、意地を張つた。

あまりに長い間、桃矢が切り出さないので、桃果がチラリチラリと桃矢に視線を送る。いつものように怒つている風ではない。どこか寂しげな、それでいて可愛らしい仕種。

桃矢は、軽く息を吐かざるを得なかつた。

お芝居とわかつていても、ついつい乗つてしまふ桃矢だつた。

「明日の今頃は家に帰れるかな？ 色々あつたけど、結局ジンベルさん達の掌で（てのひら）踊つてただけだつたよね。それにさあ、現実離れしすぎていて、なんだか夢を見ているような気がしてならないんだけど。桃果ちゃん、そこんとこどうよ？」

「夢の王国……よね」

よくできました。と桃果の顔に文字が浮き出る。

でもにっこりと笑う桃果は可愛い。ああ、ちくしょう、と思いながらも、ついつい笑みを浮かべてしまつ桃矢だつた。

「あたしね、ゼクトールに残らうと思つの」

「……なんですか？」

耳を疑つた。続いて言語理解力を疑つた。まじまじと桃果を見つめる桃矢。

「この国に残るの。でも桃矢はこのまま帰りなさい」

口を開けたまま固まつていることに気付いた桃矢。傍から見ると相当間抜けな顔だらう。

「いや、でも、戦争が始まるよー。明日の飛行機が最後だし、空母が近くにいるしー！」

指をあちこちに向けながら支離滅裂になつていく桃矢。残つていつたいどうするのか？

「桃矢は仮にも王様なんだから、ケティム軍に占領されたときに殺されるかもよ」

後ろに手を回し、腰をくねらせて足位置を調整した桃果。大人の女人の人みたいだ。

「それをいうなら、桃果ちゃんだつて危ないじやないか！」

「違うのよ」

子供を優しく諭すよつた笑みの桃果。こんな寂しい笑顔を見たのは初めてだつた。

「あたしは日本人観光客。運悪く戦争に巻き込まれただけ」

「それだったら僕も」

桃矢はそこで次の言葉を失った。

桃果が言つていたある事を思い出した。

もうすぐ彼女の家族はバラバラになる。家庭を顧みない父。自分が大事な母。桃果の求めとは乖離した家族像。そしてゼクトールで見た理想の家族愛。

桃果はここに自分の家を見つけていた。日本の家に無いものがここにはある。

桃果は日本へ帰りたくない。でも、桃矢は帰りたい。桃果と一緒に帰りたい。

だがそれは、桃果の気持ちを無視した桃矢のエゴ。自分の気持ちを安定させるためのアイテム、それが桃果。

桃矢は言葉に詰まつた。いまさら「帰らない」なんて言つても、本気で言つてるとは彼女も思つてくれないだろう。事実、桃矢は帰りたい。本当に帰りたい。

だから、よけい桃果と一緒に日本へ帰ろうなんて言えない。

そして、……次の答えに至つたのが悲しかつた。

いつか再び桃果と再会できても、もう、今までのよつたな関係には戻れないだろう。

生きる道筋が違つた二人の男女としての再会。

そんなの嫌だ！

だが、桃果を連れて帰りたいと思う気持ちは、自分が幸せに

なろうとする醜い心。今、桃果が一番ナイーブに感じている問題。たとえ、力ずくで連れ帰つたとしても、二人の間には修復しがたい深い溝ができる。

結局、二人各自が進む道は一つしかない。違う一つの方向なのに、道はたつた一つ。

他に道はない。桃矢は飛行機に乗る。それがお互い、最も被害の少ない道。

「安心して、桃矢。あたしが死ぬはずないわ。あたしのしぶとさは、桃矢が一番わかつてははずよ。桃矢と違つて、うまく立ち回れる自信もあるし能力もある」

桃果が桃矢の胸に手を置いた。桃果の目が。

「だから、心配しないで。一段落付いたら帰るから。また一緒に学校へ行けるわよ。だから、桃矢、わたしのわがままを聞いて！ お願い桃矢！」

それは間違いだ。元通りにはならない。桃果は日本へ帰つてこない。二人の関係は壊れる。

後ろすさりながら、そつと手を離し、桃矢から離れる桃果。いつもの営業スマイル。

「じゃ、お休みなさい。寝る前にオシツコ行つとくのよ！」

また違和を感じる笑顔。いつもの太陽のような笑顔じゃない。月のような美しい笑顔。

桃矢が口をはさむ間もなく桃果は走り出し、闇の中へ消えていったのだった。

次回「醜いエーハ」

桃果ちゃん、かむばーっく！

「じゃ、ここでサヨウナラと云ふことだ」

翌朝、王宮の敷地を一步出たヒル。リュックを背負った桃矢が、自転車に跨っていた。

身一つで来たのに、帰つはお土産やら記念品やら寄せ書きやら荷物が増えていた。

「何もわざわざ自転車を使わなくとも……。車でお送りいたしましたのに」

ジエベルが申し訳なさそうに眉を下げる。

「いえ、あの、ガソリンを節約した方がいいと思つて……。これ位しか協力できないし。それに、空港まで歩いてでもいける距離だし」桃矢も申し訳なさそうに、ペコペコと頭を下げている。

「これでお別れ……。

「色々と悪かつたと思つてるよ……いや、思つてます、陛下。ゼクトールが平和になつたら遊びに来てくれよな、……じゃなくて、来て下さいね」

ヒレカが手を振る。

お嬢様育ちのジムルが優雅に頭を下げる。アムルが、ノアが、サラが、目と鼻を真つ赤にしている。ミラは西の空を見上げていた。

王宮職員の女の子、宫廷料理人の老臣人。みんなが見送りに来てくれていた。桃矢に向かつて口々に感謝の言葉を述べ、心から名残を惜しんでくれた。

みんなの端っこで、桃果が笑っていた。……タベの星空のようこの明るい笑顔。

あの後、桃果はジエベル達にねじ込んだのだ。実際、ゼクトールの誰よりも敵艦隊装備に詳しかった。ジエベルに対し、国防委員長のミウラが、桃果の居残りを強く押したのだ。

桃矢と桃果の視線が空中で、運命の糸のよう絡み合つた。桃果の目が何かを言っていた。具体的な言葉はわからない。でも、別れの言葉であることだけはわかつた。

とても寂しい言葉だつた。

いつもと違うのは、桃果から糸をそらしたこと。

絡んだ糸は解ほつれた。

潮時である。

「じゃ、キリがないからこの辺で」

もう一度、誰にともなく手を挙げて、別れの挨拶をする桃矢。

「ミウラ委員長、陛下を無事空港までお連れするのよ」

水っぽい糸を隠すように、アンダーフレームをクイッと上げるマーベル。いつもより偉そうな言葉遣いだ。

「わかつていてる！ わたしがお迎えに上がつたのだ。わたしが最後までお見送りしないでどうするというのだ！」

ミウラが桃矢を促し、先に走り出す。

続いて走り出す桃矢。三回ペダルを漕いで振り向いた。

みんな、まだ手を振っていた。

桃果は……門柱にもたれるよつにして立つていた。
桃矢が振り返つたので、姿勢を正した。いかにも元氣があるよつ
に見える、月の笑顔。

桃矢は太陽を無くしてしまつた。

自分の道を走るひ。

そして、桃矢は前を向いて、空港への道を走り出したのだった。

空港へと続く白い道。朝の空は、どこまでも青く綺麗に澄んでいた。先導するミウラの形よいお尻。しかし、桃矢の心を動かすには力不足だった。

南国特有の白い家々が並ぶ街並み。

窓の造りが大きく、風通しがいいよつに全て開けはなつていて。朝の支度をしているのだろう。女の子達が忙しく動き回つていてのがよく見える。

「この子達はこれからどうなるのだろうか？」

僕のように、この島から逃げ出しこともできない。そして仮にも王だつた僕一人が、安全な場所へと逃げ出している。その事をこの子達は知らないだろう。

それを知つたら、きっと僕のことを恨むだろうな。でも僕だつて知らずに連れてこられたんだ。どこまでも損な役回りだよな。どうせ僕はそんな……。

白い板垣の家から、少女が元気よく飛び出してきた。見通しがよかつたおかげで、前もってブレーキをかける準備が出来ていた。ミウラと桃矢は余裕を持って減速する。

漁に出るのだろうか？ よく日に焼けた少女は、釣り具と水筒を持つていた。

彼女は桃矢を見て驚いたのか、目を丸くして棒立ちになっている。

「アイヤウエイ！ トーヤ陛下！」

少女が叫ぶ。

しまつた、逃げ出すのがバレたか？

一番嫌なシーンが展開される予感に、桃矢は空を見上げた。

「トーヤ陛下、あガリとうございましタ！ どウかお元気デ！」

日に焼けた少女は、たどたどしい日本語で声をかけペコリと頭を下げる。妙な違和感。

難なく少女を迂回し、走り去るミウラ。その平然とした態度に疑問を感じる桃矢。

「あの、ミウラさん…」

「なにか？」

顔だけ振り返るミウラ。特に緊張した様子もない。

「あの子、僕がゼクトールから離れることを知ってるみたいでしたか？」

「知っていますよ。」この国中の者共は、トーヤ陛下の役割を全て理解しております」

振り返る桃矢。

少女の声に桃矢の通過を知ったのだろう。家々から女の子達が、バラバラと表に出てくるところだつた。

口々に桃矢の名を出し、笑顔で手を振っていた。みんな底抜けに明るい顔をしていた。

みんな、サヨウナラと言っていた。

「トーヤ陛下の滞在日程も、陛下が無理やり連れてこられたことも、陛下が元々この国とは関係ない平和な生活を送られてきたことも、全ての国民が存じ上げております。ケティムとの面倒」とも知っています。知った上でトーヤ陛下をお迎えし、トーヤ陛下をお見送りしているのです」

目を丸く見開く桃矢。

桃矢はスピードを上げ、ミウラに追いつき併走する。ミウラの顔をまじまじと見る桃矢。

「でも僕は、たった一人でこの国から逃げるんだよ！ みんな僕のことを怒ってるんじゃないのか？」

今度は、ミウラが大きく目を見開いた。

「何をおっしゃってるんですか！ 説びなればならないのは我々です。トーヤ陛下の方こそお怒りでしょうに！」

「なんで、怒んなきやならないのさ？」

ミウラはしばらく口を開かなかつた。前を見てゆっくりとペダルを漕いでいた。

「トーヤ陛下は、どこまでもお人好しでおられぬ」
ボソリと呟くミウラ。

さすがにムツと来た桃矢は、言い返してやろうと口を開く。

「だから桃果様はトーヤ陛下のことがお好きなのでしょう。……少

し妬けてします」

桃矢より早く口を開いていたミウラの一言が、彼を黙らせた。

無言で走つていく一人。

流れしていく島の景色。

道の右側に、背の高い椰子の木で形成された森。左手に見える、珊瑚礁が作ったエメラルドの海。現実を感じさせない平和な風景。どこまでも白い道は続く。

やがて二つめの村に入った。

全国民が桃矢の行動日程を知っている。それは本当だった。

全ての家から人が出ている。

九割方が老若の女性。残りが年老いた男と年端もいかない男の子。皆一様に手を振っている。皆一様に、明るく微笑んでいる。

「トーヤ陛下、ご苦労様でした」

日本語で書かれた横断幕まで上がっている。

さつきの村の女の子と一緒に桃矢の名を呼び、感謝の言葉と詫びの言葉、そして桃矢の身の安全を願う言葉を唱えている。年老いた者達は祈りの形に手を組み、涙まで流している者もいた。

桃矢の心中は複雑だった。気持ちの区分けができるいないと言つた方がよいだろう。

村の中を通る道を自転車で走る桃矢。窓から身を乗り出す老人、一緒になつて走り出す子供。みんな笑顔だ。みんな陽気な人たちだ。自分たちの身に降りかかる不幸を知らない者はいないはず。

前方と両脇に人がいなくなつた。村を抜けたのだ。
振り返ると、村の出口に集まつた人々が手を振つて別れを告げていた。

小さい島国だ。どこへ行くのも自転車で事足りるような国だ。
村を抜けるとすぐに空港だつた。ライトの時間に、余裕で間に合うだろう。

「参りましよう、陛下」

ミウラの言葉に桃矢の涙腺が切れた。

涙を見られぬよう彼女を抜き去り、全力で自転車を走らせた。
力の限りペダルを漕いだ。漕いでも漕いでも涙が溢れてくる。
ミウラが追いつけない速度を出す桃矢。おそらく一度との記録
は破れないだろう。

そんなスピードで走るものだから、道の窪みに前輪を取られると
拳動が激しい。

桃矢は縦回転しながら宙を飛んだ。頭が下で足が上。太陽が目に
入り、網膜を焼く。

太陽はそこで輝いている。しかし、それは桃矢の太陽ではない。

僕は、太陽に顔を向けられるだろうか？ 再び太陽に巡り会う資
格はあるのだろうか？

一回転したところで、桃矢から何かが抜けた。

何が抜けたところで物理法則は変わらない。白い珊瑚の砂を敷き
詰めたゼクトールの大地が桃矢に近づいてくる。

桃矢は激しく地面に叩きつけられた。膝を擦りむいたみたいだが、確かめもしない。転がった自転車を立てて跨り、ペダルをこぎ出す。だが、自転車は動かない。壊れていた。

直らない故障ではない。ただ単にチョーンが外れていただけだ。こんなのは何度も経験している。子供の頃はいざ知らず、今ではすぐ直せる。トラブルの内に入らない。

たつぶり潤滑油が染みこんだチョーンに指をかけ、スプロケットに沿わせてペダルを逆回転。確かな音を立て、チョーンが元の位置に戻る。手が汚れたが、それがいかほどの物なのか？ シャツの裾でも拭つて落とせばいい。簡単だ。

問題は手とシャツを汚す勇氣があるかどうかだけ。

一気に飛び乗る桃矢。後ろを振り向かず、前に向かって自転車を走らせる。全速力で。

「トーヤ様！」

背後でミウラが叫ぶ。

振り返る桃矢の目を見て、ミウラが黙り込んだ。

なぜなら、桃矢の目は、何かを捨てた目だったからだ。

捨てた事によって空いた手が、別の何かをつかんでしまった。そんな目だった

「僕はもう戻らない。だつて、愛つて、究極のエゴなんだからさー。」

桃矢は、自分の決めた道を振り向くことなく走った。

その彼の目に、涙は流れていなかった。

20・醜いHな（後書き）

次回「キングダム」

携帯、トイレに落とした。。

21・キングダム

「さて、問題は敵戦力よね！」

腕まくりをした桃果が、ホワイトボードを睨み付けている。

各委員長達は、ボードを前にして机に並んで座っている。

「言えれば、教室？」

「わたしだつたら戦術航空巡洋艦、つまり空母一。防空タイプを含む駆逐艦三。フリゲート十。強襲揚陸艦一の艦隊編成で臨むわね！…逆Vの字型に配置を組み、ああだこうだと艦艇の位置を入れ替える。補給艦を含まない超攻撃型一発屋艦隊だ。

「この辺の長距離戦力といえば、旧式のミグだけ

「飛行機の音が空から聞こえてきた。桃果だけではなく、その場にいる全員が廊下の反対側の窓を見る。

ゼクトールを立つ、最後の旅客機が空を飛んでいる。

「トーヤ陛下の乗った飛行機が、無事離陸したようですね」ジエベルの口調はいつもより重かつた。黒い眼鏡を指で直す。

「俺たちをまともに見れないウブなヤツだったよな。ひょっとして童貞？」

椅子にもたれたエレカが茶化す。

「まあ、はしたない！でも、エレカ委員長のタイプだったのではないか？」

マープルがさらりとエレカを攻める。向こうつを向いたまま、動きを止めるエレカ。

「図星ですか？」

アムルが無意識にエレカを攻めている。

「桃果様に悪いですよ」

「ソソコソと耳打ちしながら、にやけているサラとノア。

ミラは一人、みんなとは真反対、光の宿らない瞳で廊下側ドアを見つめていた。

「どうでもいいわよ、あんなヤツ！」

桃果が荒い鼻息を一つ吐き出した。小さくなつていく飛行機をじつと見つめたまま。

エレカが、そこにつけ込む隙を見つけた。イタチのような目をして、狐のように笑う。

「無理すんなつて。俺は第一夫人でいいからさ、第一夫人の座は桃果にくれてやるぜ！」

対して、全く無反応の桃果。エレカはつまらなさそうな顔をした。

砂粒のように小さくなつた飛行機を見つめたまま、桃果がボソリと言った。

「バカ毛が一本飛び出したバカ桃矢！」

「誰がバカだつて？」

「バカはバカじゃない！」

いつものように食いつく桃果。眉を危険な角度に吊り上げて、背後の声に向き直る。

「桃矢以外に――」

人の目はここまで丸くなるものだらうか？ 桃矢はそう思った。

ドアにもたれ掛かつて荒い息をしている桃矢。その後ろで、青い顔をしたミウラが立っていた。

「な、なんであんたここにいるのよ？」

桃果は無意識に二歩、桃矢に向かって歩いていた。

「一いつばかり、想定外の事件が起きて飛行機に乗り遅れちゃった。
エヘ！」

小首をかしげて舌を出す桃矢。

「それ可愛いない！」

桃果の歩みが早くなる。

「自転車のチェーンが外れちゃってね。直してたら、飛行機が出ち
やつてさ。僕も戦うよ。国王だもの！ 大丈夫、何とかなるよ！」

桃果が桃矢に抱きついた。

あれ、僕も抱き返していいのかな？ と思いながら、おつかなび
つくり腕を回す桃矢。

桃果の肩幅は小さかった。壊れそうなくらい細かった。柔らかい
身体だった。軽い身体だった。暖かい体温だった。いい匂いがする
髪の毛だった。そして。

「バカ桃矢！」

泣いている桃果も可愛いかった。

「いけません、トーヤ陛下！」

大声を出したのはジェベル宰相。これほど切羽詰まつたジェベル
も珍しい。

「陛下は一泊二日でお帰りにならないと！ ゼクトールは危険な
んですよ！ 失礼ですが、トーヤ陛下ならこの危機を脱せるとお思
いですか？」

仰け反つたのは桃果が桃矢に身体を預けたからか、ジェベルの気

迫におされたのか。

「僕は、どう頑張ったって身近な人しか守れません。そしてそれが偶然、桃果やゼクトールの人たちだったんです」

桃矢の解答に、ちょっとだけ頬を朱に染めるジエベル。

「ジエベルさん、そして皆さん、僕は誰ですか？ 現在の僕は何者ですか？」

桃矢は、桃果を抱いたまま、笑いもせず怒りもせず、のっぺりとした顔のままジエベをじっと見つめる。

「王です。トーヤ様はゼクトールの王です」
ジエベルの言葉に、首肯する残りの女の子。

「王の命令は絶対です。みなさんはそうおっしゃいました。だから僕の命令は絶対です」

「一回りともしない桃矢。ほんの一時間前と雰囲気が変わっている。

「王として命令します」

桃矢の胸の中で見上げる桃果。それは初めて見る桃矢の表情だった。

「僕に……みんなを、みんなとみんなの宝物を守らせてください」

桃矢は、いつものように柔軟な笑みを浮かべたのだった。

21・キングダム（後書き）

次回「ブレイブ・ガールズ」

焼き肉ウマー（AA略）

「一生の不覚！」

あの後、我に返つた桃果。そう呟いて地団駄を踏んだ。激しく悔しがつた。苦虫をダース単位で噛みつぶして咀嚼しまくつていた。当たる者全てを切り裂くオーラを出していた。

「桃果様は敵戦力分析になくてはならないお方です。どうか御気を確かに」

ジエベルの一言で復活を遂げた桃果。「ブタもおだてりや」の枕詞を唱えた桃矢がマットに沈んだ時も、誰も口をはさまなかつた。

「状況を整理しましょう！」

下まぶたの赤味が取れてない桃果であつたが、気合いを入れて仕切り直した。

まぶたが赤い理由を作つた本人だという自覚が、桃矢に笑みを作らせていた。

だが、桃果の刺殺するような視線の前には脆いものであった。

「ケティムのゼクトール侵攻は火を見るより明らか。予想として、敵第一目標はミヨーイ島上陸。最終目標はゼクトール本島の接收！」最前列に、桃矢と国防委員長のミウラが座っている。

「敵と戦うにはまず味方から。では、ゼクトールの戦力！ これはミウラ国防委員長、あなたから説明してちょうだい！」

誰が国王かよくわからない図式だが、今の桃果に逆らう勇者はい

なかつた。

「まず、ゼクトールが誇る空軍ですが……」

ミウラが途中で言葉を切つた。アレが誇れるのか？ という桃果の視線がミウラに突き刺さつたのだ。

「まず、ゼクトール……空軍ですが、保有機はミグー7 P.F改良型が三機」

多少控えめな表現に言い直すミウラ。桃果は目をつぶつてウンウン頷いている。桃果の額に深く刻まれた皺を見た桃矢。きっと、赤い三連星の着陸シーンを再生している最中なんだなと思つた。

「海軍が保有する艦艇は高速艇が三隻」

「……高速艇の事をもつと詳しく。装甲は？」

桃果の疑り深い誰何が飛ぶ。

「も、木造の中古漁船に鉄板を貼り付けた」

「次！ 陸軍！」

容赦のない桃果であつた。

「十日前、自警団から格上げした」

「次つ！ 対空砲やミサイルは？ 対艦攻撃用の固定兵器は？ 地

上兵力は？」

だんだん、桃果の目が水っぽくなってきた。

「固定兵器はありません。ミサイル類は携帯用を含んで保持しておりません。ただし、義勇兵の募集を致しましたところ、大多数の参加希望者であふれかえりました。事務処理が追いつかないほどです！」

「しかし、兵の士氣は高まっています。皆、死を恐れぬ勇敢な戦い拳が白くなっている。

「しかし、兵の士氣は高まっています。皆、死を恐れぬ勇敢な戦士共です！」

羅列された勇猛な単語の一部で、声を裏返してしまったミウラ。聞いている方は、なんだか言い訳に聞こえて仕方ない。

当然、桃果のチェックが入る。

「練度は？ 男女構成比は？ 平均年齢は？」

「一週間前より訓練に入りました。皆、愛国精神に溢れた若者ばかりでとても熱心です。おやつの持ち込みも殆どありません。構成比は女が百に対して男ゼロ。これは国内の男女構成比がそのまま現れたもので、やはり統計学は実用的かと思う所存です。次に平均年齢ですが、これは高いです。一五・七才！ 独身者を優先的に採用したせいかと思われます」

「次つ！ 敵戦力の分析と情報。これはあたしが話すわ！」
「気合い一閃！ 気持ちを持ち直す桃果。そうだ、これがいつもの桃果だ。彼女は見た目より強い心を持った少女だ。桃矢は、居残つたことが正しかったと確信した。

ホワイトボードの前をウロウロしている桃果。先生よろしくマークーを後ろ手に持つてふんぞり返っている。

「敵空母は重航空巡洋艦つてのが正式名称だけど、ここはあたしの趣味で戦術航空巡洋艦つて呼ばせてもらつわね。そっちのほうが正しいイメージを持てるしね」

何が正しいイメージか？ 桃矢には解らなかつたが神妙に頷いておいた。変に突つ込むと、傷が増えるだけのような気がしたからだ。どうせ、ここにいる者達にとつて「戦術」でも「重」でも、あまり違ひはないだろうから。

なぜなら、国防委員長のミウラを筆頭に全員、海軍兵器に関する知識が皆無に等しかつたからだ。

「戦術航空巡洋艦。それつて空母には違ひないけど、赤城やエンタープライズやカール・ビンソンみたいな移動式空港タイプを想像してもらつては困るわ。そうね、上部構造物の少ない大型巡洋艦を想像してみてほしいの。それでも公式最大搭載数は、四十機を誇るわ！」 そう言つて桃果は、カキコキとホワイトボードになにやら幾何学模様を描いた。

「排水量五万五千トン。空母につきもののカタパルトは付いてないわ。艦載機は、艦首構造物であるスキーのジャンプ台みないので発艦するの。ここよ！」

桃果は絵の左端を赤のマーカーで大きく囲んだ。

「あ、それ空母だったの？ 僕はてつきりグラフだとばかり……、いえ何でもないです」

桃果の厳しい視線に絶えられず黙り込む桃矢。突つ込んではいけない場所だつたらしい。

「え？ オレはてつきリアフリカ大陸の略図だとばかり……」「

「ロールシャッハ・テストじゃなかつたんですか？」

開戦決意後、ゼクトール首脳陣に、初めて動搖が走った。

「艦載機タイプのフランカーを二十機搭載してゐるはずよ」

一切の因果律を断ち切るかのように大声を出す桃果。頬が赤い。

「質問です！ 桃果様！」

財務委員長のマープルが、起立して挙手した。

「はい、マープル委員長」

桃果が指名する。

「なぜ二十機しか搭載してないのでしょうか？ 四十機まで搭載で
きるのでしょう？」

確かに、桃果は冒頭で四十機搭載と言つていた。

「いい質問です、さすが財務委員長。数字に詳しい。タネを明かし
てあげるわ。それはね、ケティムがロシアより購入した、完成品の
フランカーが二十機だつたからよ」

自慢げに腕を組む桃果。口元が斜めに笑つていた。たぶん、笑み
に意味はない。

「フランカーを二十機落とせば丸裸になるつて事でありますか？」

丸裸以前に、どうやつて二十機も落とすのが問題だらう、が、
あくまでもたとえ話。桃矢は突つ込むことを控えた。

「甘いわね。巡洋艦つて名称が付く以上、兵装も戦闘艦らしく充実
しているわ。いい？ 今から標準固定兵装を話すから、メモ取りな
さいよ！」

そう言つて、大きく息を吸い込む桃果。

「対空ミサイル百九十一セル。対艦巡航ミサイル十二セル。近接防衛システム八基。三十二ミリガトリング砲六基。対潜ロケット一基。どうつ？」

息を継ぐことなく一気にカタログスペックをしゃべり終えた。ミウラをはじめ、ここにいる女の子達は、ただ口を開けて固まるだけだった。

メモなど取つている者はいないのであつた。

……素人がメモを取つてもあまり意味はない。とも言える。

22・ブレイブ・ガールズ（後書き）

次話「第一回国防会議」

年末はリア充の予定！

だれも口を開かないでの、桃矢が口を開くことにした。

「とにかく、空母……じゃなかつた、戦術航空巡洋艦単体でも、ゼクトール軍にとつて、充分な驚異だつて事だな？」

「認めたくないけど、桃矢の言つてることは的を得ているわ」

いやいや拍手をする桃果。釣られて拍手をする女の子達。眠そつな目をしていたミラも我に返つて拍手している。たぶん彼女らは、桃果の拍手の意味を理解してないだろう。

「駆逐艦やフリゲートには連射砲や、……とにかく痛い装備が満載よ。もちろん、複数目標への同時攻撃可能な戦闘統合システム……」

「いっぱいの標的に同時攻撃できるのよー」

まるで自分の物のような言い方をする桃果。ちよつぴり自慢げ。

「ドック型強襲揚陸艦は、艦内にホバークラフト型の水陸両用艇を四隻……つまり、物資ごといきなり上陸できるのよ。ゼクトールに！」

桃果は、ゼクトールの人たちに変な幻想を与えないつもりだ。徹底的に、ゼクトール軍の無力さを訴えていた。

甘い期待を持たせてはいけない。一度、彼女らの認識を更地にしてしまわなければならぬ。

「航空機は例のフランカー。空軍機との違いは全遊動式のカナード翼ね。固定武装は三十三ミリ機関砲。最大離陸重量は、……とにかく大型で、爆弾いっぱい積めるの。世界トップクラスの戦闘力を持つてるの！」

桃矢にはわかる。

雷音のごとき排氣音をまき散らし、滑走路上空でターンしていくフランカー三機。桃矢の脳裏に、ノミと金槌で刻まれた恐怖が蘇る。

あんなのに係わつたら確実に命を落とす。戦うとかそんな次元の話ではない。

しかし、南国の女の子たちの理解は、そこまでついて行かない。

「例えるなら可変式機動人型兵器二十機と、旧式ショルダータックル専用機三機の差。ミグでどうにかできる存在じやないのよ」

「僕たちにはよく解るたとえだけど、彼女たちにはちょっと解りづらいかな？」

桃果が言葉を継いだ隙を狙つて、桃矢は声をかけた。

「じゃ、敵はチート」

「いやそれは簡単すぎるかな？」

しかし、これでは言い過ぎかも……。桃矢はそう思つて聞いていた。

責任者として矢面に立つミウラ。眉を吊り上げ、唇をへの字に結んでいた。顔色が青い。

ミウラだけではない。年少組のサラやノアも、顔が紙のように白い。

桃果の講釈はまだまだ続きそうだ。桃矢としては、ここいらで方向転換したかった。

「桃果の説明で、ケティム艦隊が化け物みたいだと解つたけど、何か対抗手段はないの？」

敵のチートだと驚異だけを話しても仕方ない。味方が鬱に陥るだけだ。

桃果は桃矢の言葉で、その事に気付いたようだ。

擦れ音を立て、マジックでホワイトボードに漢字一文字を書く桃果。絵と違つて達筆だ。

「空海？」

桃矢、口に出して読んでみる。

弘法様が何か？

桃矢は腕を組んで首をかしげた。

「空と海で戦つてはいけないということー。」

ああ、そういうこと……。

「残された手は地上戦ですね？」

ノートを取りながらミウラが聞いてきた。

それも有効な反撃法なのだろうが、充分な訓練を受け近代戦武装した敵地上部隊が、チームプレイを心がけながら掃討戦に入られたら、ゼクトール側の人命損失は激しいだろう。

桃矢としては、空港への道すがら、別れを惜しんでくれた女の子達が、血に染まる光景だけは見たくなかった。

それ故に、直接対決以外の戦いを模索しなければならない。

例えば、砲火を交えずに戦争を勝利で終わらせる方法。

「経済や外交も武器にならないかなあ？ ほら、よく言つじやない。戦争は外交手段の延長である、つて」

桃矢の提案に、豆鉄砲を喰らつたような顔をする桃果。そんなに意外だつたのだろうか？

「それいいわね。実に知能犯よ！ ゼクトールは出稼ぎ以外に、外貨収入はないの？」

まずは経済。桃果は、財務委員長のマープルに発言を促す。

マープルは、縦ロールの入った金髪を優雅に手で払いのけながら起立した。

「主な輸出品目は、タピオカ芋と椰子の実です」

血鑿げなマープルの報告を受け、富士山の形に口を結ぶ桃果。器用なヤツ。

「もつとパツとしたブツ、輸出してないの？」

人差し指を顎に当てるて考え込むマープル。はたと手を打った！

「金額は少ないので、切手と熱帯魚を」

「過去！ 過去よ！ 過去この国は、抜本的な経済政策を何かとらなかつたの？」

マープルの言葉を遮つて桃果が叫んだ。

巻き毛を指でいじりながら斜め上を見て考え込むマープル。と、何かを思いついたのか、いきなり手を打つた。

「生前、ゼブダ前国王が、思い切つた外交戦略をとつておられました！」

「ほほう、聞かせてもらおうじゃないの」

前国王と言えば、旨いもの食つて女の子にスケベな事して、趣味に走るだけ走つて成人病の合併症で死んだお方。あまり期待はできないが、この際だ。藁にもすがる思いである。

「先々代の頃、ゼクトールは、中華民国、いわゆる台湾を国家承認していました。でも、前国王ゼブダ様のお考へで、台湾と国交を断絶。一億ドルに上る援助と引き替えに中華人民共和国、つまり中国と国交を樹立しました。しかし三年前、再び台湾と国交を復交。その際、台湾より多額の経済援助金を受け取つております」

一億ドル。当時の日本円にして百数十億円。プラス、多額の経済援助。桃果の田の色が変わる。

「いいわね！ いろんなキャンペーンが打てるわ。で、合計金額はどのくらい？」

身を乗り出す桃果。

「歴代国王の対外借金を返した後、前国王が趣味、……もとい、政略で集めたいろんな電子機器と遊行費と食費、……もとい、王室費に当てたため、全て消えてしましました」

「歴代国王つ！ どんだけ借金作つてたのよつ！ 前国王つ！ あなた食べ過ぎ！」

桃果が窓の外に身体を乗り出し、青い空に向かって吼えた。

その様は、ライカансロープに変身するんじゃないかと、本気で心配したほどだ。

桃矢は、月が出てなくてホント良かつたと、心から思つたのだった。

23 ゼクトール内閣、第一回国防会議。青空編。（後書き）

次話「ゼクトール内閣、第一回国防会議・チョモランマ編」

皆様、よいお年を。

「本当に何も残つてないの？」

桃矢が念をつく。

「はい。最後に買った風力発電機でちょうど残金ゼロです。怖いくらいに残金ピツタリでした」

「それ、騙されてるんだ。日本企業はゼクトールのこと調べ上げた上で国王をだまくらかしたんだ！ 青い空のばつきやるーー！」

桃果の隣で、ゴバルトの空に向かつて吼える桃矢。

「まあ、お一人とも仲のよろしい」と

ジエベルが微笑んだ。あまりに間の抜けた合いの手にガス抜けし、冷静さを取り戻した桃矢。

まあ……ジエベルさんは、南国的と言えば南国的か。

「先代はいろんな事をやつてたんですね？」

半ばあきれ顔の桃矢。特に答えを期待しての発言ではない。

「その他にも、国際的な金融関係の大規模規制緩和計画も立案なされました。海外からゼクトールへの金融業参入、並びに外資本の大額流入を目指されたのです」

「スイスがモデルね。なかなかやるじゃない。見直してあげるわ、前国王！」

桃果にどういう権限があるのか知らないが、彼女が前国王を褒めた。金融関係で大国や大企業にコネがあるかもしれないからだ。桃矢も期待に胸が高鳴り、頬が緩んだ。

「ところが

「え？」

マークルが放った不吉な接続詞に、桃矢と桃果の笑みが凍り付く。

「マネーロンダリングの温床になる、と、アメリカ合衆国より強硬な圧力がかかり、計画が潰れてしまいました。この策に全てを賭けていたゼクトールは、収支計画を大幅に縮小せざるを得なくなり、以後現在に至るまで厳しい財政が続くことになったのです」

学習発表会のノリで答えるマークル。非常ににこやかで元気だ。

「な、なにしてんの、先代様！」

湧き上がる脱力感に、膝をつきそうになる桃矢。

なんなの、この間抜けさ？

いやいやいや、ここは踏ん張りどころ。桃矢は、勢いでハンドルを大きく切った。

「外務委員長のサラちゃん！」

「はい！」

いきなりの指名に飛び上がって驚くサラ。

「ゼクトールは、大国と軍事同盟結んでない？ あるいは、強力な経済援助関係にある国とか、関係が友好的で人的交流が盛んな国とか？」

人、それを他人のふんどしで相撲を取ると言つ。しかし国際社会では常識の範疇。

「えーと、アメリカとは、先のマネーロンダリングの一件で関係が悪化しています。中国は、台湾の認定により国交を断絶してます。台湾は国連に加入してません。ヨーロッパ系とロシアは、大使館を開設していませんし、向こうもゼクトールの存在 자체を知らないと思います」

桃矢は、チヨモランマ山頂に一人で立つている幻を見た。山の頂を征服したはずだが、周りに人どころか物がない。山すらない。孤立無援。下山するにも自力頼みだ。

しかし、先代国王ゼブダ・バルギトル・ゼクトール。馬鹿だブタだと侮っていたが、水着を制服に採用したり、思い切つた外交戦略をとつたりと、なかなかの人物だ。

「恐れ多くも……、トーヤ陛下の母国である日本政府を頼つてもらえないでしょ？ 日本は世界でも五指に入る軍事費を持つ国だと聞き及んでおりますが？」

サラがおずおずと逆提案を持ちかけた。緊張で肩から上がガチガチだ。

「ナイナイナイ、ぜつたいあり得ない！」

桃矢と桃果、シンクロナイズして手を左右に振る。

「十年前までは一国平和主義を謳歌していた国よ。弾丸飛び交う戦鬪中の地域へ自衛隊を丸腰で派遣しろって、平気な顔して主張する政治家がいる国なんだから。ぜつたい無理！」

虫の死体を見るような目をして否定する桃果。

それが信じられないでいるサラであった。

24・ゼクトール内閣、第一回国防会議。チヨモラシマ編。（後書き）

次回「ゼクトール内閣、第一回国防会議。太陽編」

さて、おふざけもここまでです。
作者、いっぱいいっぱいです。

「せめて正確な敵艦隊の構成がわかつたらなあ。……偵察つたつて、ハリネズミのような戦闘艦が相手だし、……なんと言つてもあのフランカー。近づくのはムリだな」

桃果の推論でしかない艦隊構成では心許ない。正確な艦隊編成と位置を知れば、攻撃目標も絞れる。万が一にでも打つ手があるかもしれない。

「確かに、正しい敵戦力を把握するためにも偵察は必要です。敵を知らずに戦いを挑む軍は、必ず負けます」

ミウラ国防委員長が桃矢のぼやきを拾つた。小さな声で言つた独り言なのに、ミウラは聞いていたのだ。じつとうつむいて考え込んでいるミウラ。

「だめだよ。偵察に行つた人は生きて帰れない。危険な行動は慎もう」

暗い表情をする軍人は何を考えだすかわからない。桃矢は、ヒラヒラと手を振つてミウラの行動を諫める。

横道にそれるのはもうよそう。時間が限られているのだから。でもきもしない後ろ向きなことを考えても仕方ない。桃矢は前向きに考えることにした。

「そうなると、……舞台は国連に移されるわけだけど……」

桃矢は、そう言つてからゆっくりと桃果に視線を移動する。

桃果も桃矢に視線を向けていた。初めてのお使いに出た子供を見る目だった。

「明後日、国連で今回の問題が取り上げられます。エンスウの活躍に期待しましょう!」

眉を吊り上げながら拳を握りしめながら力説するサラ外務委員長。親友で幼馴染みであるエンスウ代表の実力を過大評価しているのが、微笑ましくもあり悲しくもある。

「あの子に任せるとかあ?」

なんとも情けない顔をする桃果。桃矢も同じ心中だった。

「エンスウちゃんはともかく、僕はお兄ちゃんのパイロン君が心配だなーっ」「だなーっ

懐から飛び出していた導火線を思い出し、桃矢は肩を落とす。

しかし、落ち込んでいても仕方ない。桃矢は下腹に力を込め、姿勢を正して気力を奮い起こす。

「敵の力もだいたいわかつたし、ゼクトールの現状もだいたいわかつたきた。次に、対処法を考えよう」

桃矢は、落ち込みがちな暗い話題から、少しでも明るい話題に振つてみた。

「では、現在まで進行させてきました、我が国の防衛に関する補足説明をいたします」

ミウラがメモを開いて立ち上がる。

「実はミヨーイ島に、少数民族ながら抵抗部隊が上陸しておりまして、防衛陣地を構築しつつあるのです。ケティム侵攻が始まつて間もなく、出稼ぎに出ていた男衆の中で、すぐに帰国できた者が、昼夜の境なく補強工事に勤しんでいます」

「え? 男の働き手がいたの?」

桃果が素になる。その声に、少なからず驚きがあつた。

「はい。さすが愛国心溢れる我らがゼクトール国民。少ない人数で

すが、世界各地に散らばって出稼ぎをしている男達の中には、うまい具合に休暇を取れたり、契約更新の節目などで、即帰国可能な者もあります。その他の者達も、雇い主に事情を説明して、おつつけ帰国すると連絡が入っています

「頼もしい父兄だわ！ 緊急事態だからね。人手は多い方が良いわよね」

桃果がしきりに感心する。

だが、しかし、果たして……。桃矢は言葉にしないし顔にも出さなかつたが、彼らが帰国したとして、どれほどの役に立つと/orのだろうか？

軍隊というのは一朝一夕にできる物でない位、桃矢にも知識として蓄えられている。

剣と槍で戦っていた時代ならともかく、近代兵器を駆使する現代戦で、素人集団の義勇軍が、はたして、どれほど効果的に組織だった抵抗ができるのだろうか？

犠牲者が増えるだけ。流れる血の量と、失われる人命、そして悲しみと憎しみが増えるだけではないだろうか？

「まず、上陸予想地点にトラップを仕掛けるのが定石ね。落とし穴や虎鉄なんかもけつこう有効よ！ ちょっと聞いてる？ 桃矢！」

「え？ あ！ 聞いているけど、僕その辺は苦手で……」

聞いてない。桃矢は適当に話を合わせただけだ。

桃矢の深い思惑をよそに、桃果主導のケティム対策会議は、随分先を走っていた。

各委員長が出した対抗策に、桃果が点数をつけるという地点にまで走り去っている。

状況判断のため、発言を控えて聞いている桃矢。どうやらセコイ

対策で、なおかつ経費が少なければ少ないほど点数が高くなるのだ。

桃果のテンションが一番高いのは当然として、九人の委員長達もノリがいい。和気あいあいとした空氣の中、おのおの、よつセロイ戦術を披露していく。

「僕も作戦を一つ思いついたんだけど」

桃矢が話に入つていく。未来が暗い中、今は少しでも明るく対策を考えたかった。

「長い草の両端を縛つておいて、敵兵の足を引っかけるつていうのどうかな？ 経費はかからないし、雑草対策になるし」

桃果が出した点数は三十点であった。

「もう一つの理由は何よ？」

その夜。またもや王宮を抜け出し、浜で夕涼みをしていた桃矢が驚いている。

後ろから、いきなりかけられた桃果の第一声であった。

「ナニが？」

虚を突かれたせいもあるが、何のことだかさっぱりである。頭が全く回転しない。

「ほり、桃矢が空港から引き返してきた理由のあと一つ。覚えてるわよ。一つの理由つて桃矢がはつきり言ったのよー。どうせ、

水着絡みでしようけど！」

そこまで言われて、やつと桃矢の脳神経シナプスが繋がった。一つめが自転車の故障だったというアレだ。

「あの場面でよく覚えていたなー、つーか、あのムードを経てよく聞けるなー」

あきれ顔の桃矢。撫で肩になつて脱力している。

「話をそらそらうつたつて駄目よー、未来に禍根を残したくないの。きりきり白状なさいー！」

危険な角度に眉を吊り上げた桃果。柳眉つてのはこうこう綺麗な眉毛なんだろうな、となにげに桃矢は考えていた。

「隠すつもりはないさ」

「だつたら、はつきり言いなさい。スカシや誤魔化すのは無しね！」桃果の顔がドンドン近づいてくる。危険な距離まで近づいてきて、これはもうアレしかないのかな？ 桃果はアレのチャンスを提供しているのかな？ とドキドキしていたら、微妙な空間距離を残して桃果が止まつた。

息づかいが聞こえる距離。しかし、行動起こすには遠い距離。これは否定？

逡巡の末、きつぱりと諦めた。情けないが、自分でも押しが弱いと思つてゐる。

もつとも、恒星系の輝きを持つ桃果に押し勝つとつと思うのが、そもそももの間違いだ。

溜息一つ付いて周りを見渡す。ゼクトールの夜は早い。日が暮れて暗くなると、人々はすぐに眠りにつく。そのため、町の明かりは少ない。秘密を打ち明けるにはうつてつけだ。

「太陽系にある恒星は一つ。太陽だけだつてこと知つてゐる?」

桃矢は、人差し指を一本だけ立て桃果に逆質問したのだった。

次話「お元氣で……」

暗いの嫌い！ 狹いの怖い！

「なんだか今朝は静かだね」

ゼクトールの朝は早い。日が暮れてすぐに眠りにつく代わり、日が昇るとすぐに生活が始まる。余計な電力を使わずに済むので、経済的と言えば経済的だ。……江戸時代？

昨日の続き。早朝より、ゼクトール首脳陣による対ケティム対策会議が開かれようとしていた。眠たい目をこすりながら、桃矢が冒頭で口を開いたのだ。

「桃果様は、イルマ様の呼び出しを受け、神殿へ出向いておられます。そのせいではないでしょうか？」

台ふきんを手に、会議用テーブルを拭いている水着エプロン姿のジエベルが答えた。

「なるほど」

まだうまく頭が動いてないが、原因と結果による因果関係だけは理解できた。

「ところで……」

いつか言わなければならぬことは、早く言つた方が良いに決まつていてる。

桃矢は、赤いヘルメットに注意を移した。低血圧なのだろうか？ 朝つぱらから青い顔をしたミウラの前に置かれている。ショウエイのホーネット。数は三つ。随分使い込まれたヘルメットだ。そこかしこに傷が付いていて塗装がはげていた。

もつと正確に言つと、赤い三連星が使つてているヘルメットにしか見えない。

「これは何ですか？」

「赤い三連星」と、ノイエ少尉、タマキ准尉、グレース曹長のヘルメットです

沈黙すること約三秒。

実は、見たときから気がついていた。その意味を。決して戻ることのない偵察飛行に出たという意味。だけど、信じたくないかったのと信じられない気持ちが、頭のどこかで、その発見を遅らせていたのだ。

「なんて事してくれたの！」

桃矢はテーブルを叩いて声を張り上げた。

各委員長達は驚いて国王をただただ見つめる。桃矢は怒りに身を震わせていた。

「昨夜、三人と相談しました。その結果です。彼女らの気持ちをお察し下さい」

「察せないし！　すぐに呼び戻すんだ！」

桃矢はこの地に来て、初めて怒りの表情を見せた。憤怒の形相でミウラを睨む。

対してミウラは一步も引いていない。表情を変えることなく、桃矢を正面から見据えている。

「できません

「なぜ？」

桃矢の問いに、ミウラが黙つた。しかし黙り込んでいた時間は短かつた。でも、三人の顔を思い浮かべるには充分な時間だった。

「ゼクトール空軍は、フランカーの出現によって無力化されました。最も悔しがったのはあの三人です。昨日、トーヤ陛下がおっしゃるまでもなく偵察飛行の重要性は解つておりました。だから昨夜、あの者達と相談したのです」

真つ直ぐ桃矢を見つめ……いや、桃矢の目を見られないでいるミウラは、桃矢を透かして後ろの壁を見ていた。

静まりかえる会議室。誰も口を開かない。

「ミウラさんは理解しているのか？ 対空砲に落とされるか、フランカーに落とされるか、いずれにしろ手も足も出せずに、殺されに行くようなものだよ？」

全く理解できない。桃矢には理解できない行動だった。

「彼女たちはヘルメットを残していきました。どうせ帰つて来れぬのだから、身を守る物など必要ないと。パラシユートも積まないと。少しでも重量を軽くして飛んでいきたいと！」

行き過ぎだ！

ゼクトール人の純粋さはわかっていた。純粋さが暴走するとともでもないことになる。桃矢は彼女達を理解しきれていなかつたのだ。

「責任はわたしにあります！ 命令を出したのはわたくしです！」
「どんな命令出したんだよ！ 精神力で帰つてこいとでも言つたのかい？」

桃矢の声は大きく荒い。答えによつては爆発しそうだ。

ミウラは、桃矢の追求に再び黙り込んだ。完全に桃矢から視線を外し、天井の隅を見つめていた。それは、何かを思い出している風にも見えた。

「あの者達に、……死んでくれと命じました！」

桃矢は言葉に詰まった。

理解不能。

ミウラが上を向いたのは、桃矢の視線から逃れるためだけではない。涙を堪えるためだ。

桃矢はゼクトールの危機に死ぬ気を持ち合わせていなかつた。そんな甘い桃矢は、月並みなセリフしか言えなかつた。

「それで彼女たちは何と？」

「死んできます、と。笑つて……」

ミウラが泣いた。気丈夫のミウラがボロボロと涙を落としている。

「やはりそれはできない。許されることではない。ナニだよ、そう、軍部の独走は許されない。彼女たちと話がしたい。無線があるはずだ。案内してください！ これは国王命令です！」

ミウラに桃矢の命令を断る権限はない。彼女が先頭に立つて桃矢を案内した。

「国防委員会室です」

案内されたのは、王宮の一階部分奥。先程までいた会議室の斜め下だ。

「きちんまりした部屋だった。

正体不明の機器類を乗せた小さなテーブルが一つ。スチール製の

事務机が一つ。長椅子が一つに、茶器が入った小さな食器棚と洋服掛けが一つずつ。それがゼクトール軍統合本部の全てだった。

無線機らしい機器の前に座っていた少女が一人、桃矢の入室に驚き、立ち上がって敬礼をする。オペレーターだろうか？ 一人はヘッドホンをつけたままだった。

ちょっと戸惑つてから、ぶっきらぼうに手を挙げて応える桃矢。

「三人との連絡は？」

单刀直入に桃矢が聞く。

陛下に直接お声をかけられ、オペレーターは堅くなつて答えた。連絡が取れるか？ との問い合わせ。だがそれを敵艦発見の連絡があつたか？ との意味に捉えた。

「今は……まだ……」

オペレーターが不自然に言葉を切つた。視線を無線機に合わせ、眉をしかめている。

「今通信が！ 失礼します！」

年代物の無線機に向かつて座り、ダイヤルを回して調整する。

「タマキ准尉より入電！ モールス信号です！」

一気に緊張が高まつた。もう一人のオペレーターがメモを片手に、ヘッドフォンの子が話す言葉を書き写しながら桃矢達に伝える。

『ワレ、テキカンタイト、ソウグウス』

「うわ、遅かった！ てか、なんでモールス？」

頭を抱える桃矢。

対してミウラは冷たいくらいに冷静だつた。

「気休めかもしれませんのが電波妨害対策です。タマキ准尉が通信を

担当しています。彼女は片手で操縦ができないため、発信器を口で操作することにしました。ちなみに、写真撮影はグレース曹長。ノイエ少尉とタマキ准尉は、グレース曹長が写真撮影に成功した後、敵を引きつけるため敵艦隊へ突入の予定です。グレース曹長は、自機が撃ち落とされる直前に、保護パックに詰めた撮影機材を投下。海軍の船および、ゼクトールの民間船総出で機材を拾い上げる計画です

ミウラも計器を見ている。針が微妙に動いているのを見つめているのだ。

桃矢は口を開かない。もうここまで来てからの後戻りは不可能だと知つたからだ。

「入電、再開しました。『クウボ、イチ。オオガタクチクカン、サン。』『ガタクチクカン、ジュウイチ。ソノタ、オオガタセンエイ、二』通信中断しました！」

声が出ない！ 熱がこもる。桃矢は拳を握りしめていた。

「通信再開です」

「ほー！」

熱い息を吐き出す桃矢。しかし予断は許さない。

「報告します。『オオガタセンエイハ、キヨウシュウヨウウリクカント、ヘイインユソウセント、オモワレル。クウボヨリ、テツキ。ハツカソスウ、ロク』通信中断！」

桃矢の手の平から汗が噴き出している。

「ミウラさん、もう充分だ！ 早く引き返させるんだ！」

叫ぶ桃矢。無駄とは知りながらミウラが通信機に手を伸ばす。だが、それよりタマキ准尉からの入電が先だった。

「通信再開。『サツエイセイコウ。グレースキ、ハンテン。ノイエキ、トツニコウカイシ。ワレモ、『レコリトシ-コウス』通信中断！」

「ミウラさん早く！」

桃矢が叫ぶ。しかし、ミウラはアクションを起こさない。帰還を命じても彼女たちは従わないだろう。タマキ機とノイエ機が突入しなければ、グレース機が帰れないからだ。

「通信再開。『ゼクトール二、エイコウアレ。トーヤヘイカ、オゲンキデ。ワレラ』『通信途絶えました』

言われるまでもない。激しい雜音と、大きく振れるアナログメーターの針。

「空母、一。駆逐艦、二。フリゲート、十一。強襲揚陸艦、一。兵員輸送艦、一。桃果様の予想とほぼ一致します。……お許し下さい、トーヤ陛下」

うなだれるミウラ。肩が小さく揺れている。

桃矢は、ズボンの後ろポケットを探つた。

くしゃくしゃのハンカチをミウラに差し出すしか、他に「すみ」とがなかつたからだった。

27・無敵脳天氣（ゼクトール魂）

「つまく撮れてるじゃない！　ソラコトオホロホ白黒写真に限るわね！」

現像された数枚の写真を前に、ソラ満悦の桃果だった。なにせ、軍艦の生写真である。マニアにはたまらない代物らしい。もううつ氣満々だ。

「強襲揚陸艦はドッグ型じゃないわね？　でもだいたいあたしの予想通りね！」

俯瞰構成で表された写真は、ケティム遠征艦隊の全容を見事に捉えていた。

ほほ、桃果の予想が的中した艦隊構成である。桃果の鼻が高い。「使い捨てバカチヨンカメラだといって、おろそかにはできませんね！」

ここにこ顔のグレース曹長。褒められたのが余程嬉しかったのだる。

「すみません、途中で咽せてしまって無線機を落としてしまいました。拾うに拾えなくて……あたし、今度は片手操縦を練習しますー！」

泣き顔のタマキ准尉。思いつきり頭を下げる。

「ケティムのパイロット達に比べれば、私たちはまだまだよ。みんなで猛特訓よ！」

ノイエ少尉がタマキ准尉を励ます。

「こやこやこやー、これはビリコう事なのか、国王権限で説明を要

求します。つーか、あの感動は何だったのかの説明も求めます」「疲れ切った表情の桃矢。頭頂で收まりの悪い毛が一房、平和に揺れていた。

目前で、自分の足で立っているノイエ、タマキ、グレース、三飛行士達に説明を求めた。

つまり、赤い三連星は全機無事帰投したのだ。

パイロットはおろか、機体にも傷一つない。無傷、無血の帰還をとげ、おやつのバナナチップスまで平らげていた。

「いや、だからさ、ものすごい空中戦だつたんだろ？」「ゴブラン？木の葉落とし？ なんとかサークルスって言うよね？ チョーすげー鬼テク使つたんだよね？ 身体は何ともないの？ 横Gなんか大変だつたろ？」

三人の話に割つてはいる桃矢。三人が無事帰還した奇跡話を聞きたかった。ひょっとしたら、ケティム空軍はフヌケぞろいかもしれないではないか！

「ミグで空中戦は無理ですね。スピードが違いますから、あつさり並ばれちゃつてえ」

ノイエ少尉が三人を代表して、しかも嬉しそうに話し始めた。

彼女の話す事の顛末はこうだ。

赤い三連星が操るミグに並んで、挑発するケティムのフランカー乗り。あまりの性能違いによる思い上がりのためか、ミグに乗るパイロット達をナメてかかっていたらしい。

彼女たちはヘルメットを被らずに飛行している。フランカーの口クピットから、ノイエ達の容姿が丸見えだった。

ゼクトール機パイロットが、年端もいかない女の子とわかつた瞬

間、ケティムパイロットの間に衝撃ならぬ、萌えが走った。

フランカー乗り、男である。加えて、ケティム艦隊、男所帯である。

可愛い女の子が泣きそつになつてミグを操つてゐる。フランカーと頼りげ無く飛ぶその姿を見て、開けてはならない扉を開けてしまつたらしい。

結果、戦闘が始まるどころか、赤い三連星は、フランカー乗り達によつて丁寧に誘導され、ゼクトールへと帰還したのだ。

笑顔プラスサインで「クピットに收まつてゐるパイロットの写真まであつた。

どこの国も男は変わらない。……馬鹿？

「まあ、結果として無事だつたんだから良かつたものの、もうあんな危ない真似しちゃだめだよ！ これは国王としての命令だからね！」

意図的に怖い顔をして注意する桃矢。桃矢の笑みが、似合わないと言つてゐるようだ、なんだか辛かつた。

「ところで、桃矢はどこで何をしていたの？」

もつと厳重に注意したかったところだが、もともと桃矢はそいつたキャラではない。ましてや桃矢の前でそんなことすると、彼女が敵に回る可能性が高い。話をそらすに限る。

それに桃矢は乗つて来るだろ？ これ以上桃矢を虐めると、赤い三連星の無断出撃や、命令無視をしたミウラの処罰に及びかねない。桃矢だつてそれくらいわかつてゐるはずだ。

「……イルマに案内されて神殿の地下に降りていたの。前国王が大人買いしたコンピューター類を収めた部屋の見学よ」

残念そうな顔をして話を切り替える桃果。やはり、もう少し桃矢を虐めたかったのだ。

「例の幽靈騒動の後、イルマが先頭切つて開かずの間探査に踏み切つたらしいわ。そして見つけたんだけど、仕事柄、彼女つてメカ音痴なのよね。だから代わりにあたしが見てやってたの」

やや自慢が入る感の桃果。その彼女の肩を後ろから叩く人がいる。

文部科学委員長のミラ・ロコモコである。ゆっくりと力のない目で桃矢を見て、ゆっくりと右手があがり、ゆっくりとミラ自身を指さす。

「やつそり、ミラもお手伝いしてくれたわね」

ミラは、首をゆるく振つてみせる。彼女なりの血口主張らしい。

「えーと、……あたしもお手伝いしたわ」

桃果が折れた。

そういえば朝の会議にミラもいなかつた。彼女が鑑定の主力だったのか。

ミラはゆっくりと手を下ろして、明後日の方角を見ている。気が済んだらしい。

「いくつかの離れた部屋に分散してあつてね。古いのとか新しいのとか、聞いたことないメーカーだつたり、メーカー 자체の表示がないパッチ物だつたり、いろいろ取りそろえて騙されてたみたいよ。あのブタ野郎、だいたい」

「ちょっと待つて、ちょっと待つて！」

桃果の説明をエレカがカットする。

「いま、前国王を「ブタ呼ばわりしなかった？」したよね？ そう聞こえたんだけど！」

「何のこと？」

桃果が怪訝な顔をする。わざとなのだが、一見、本当に何の「こと」かわかつてない顔だ。

「ゼブダ様って言つたんだけど、たしかに日本語の「ブタ」と発音が似てるわね。でもね、いやしくも前国王陛下よ。いくら何でもそんなこと言つわけないでしょ？ エレカ委員長、あなた未曾有の危機に対し、働き過ぎで脳が疲れてるんじゃないの？ だめよ、今一人でも欠けると大変なことになるわ。特にあなたの仕事は重要な部分だし。いいお医者さん紹介しましょうか？」

押しの強い桃果。対して、こめかみを押さえて考え込むエレカ。

「ま、たしかに、疲れてるのかもしれない。誰だつてゼブダ様をブタ野郎と思っていたのは事実……いやいや、良いお医者さん紹介してくれる？」

保険委員、もとい、厚生部門を兼ねる農務委員長のノアに介添えされて、椅子に座るエレカ。辛そうな表情をしているが血色は良さそうだ。たぶんどこも悪くないし、疲れてもいなためだと桃矢は思つた。

「で、使われていな「デスクトップ型」一式を持つてきたの。よく観察すればわかると思うけど、国王執務室にコンピュータが一台もなかつたのよ。これつて殺風景でいけないわ」

パソコンのあるなしで和むかかうかは置いといて、全く無いのも困りものだ。

外部、特に海外からのニュースを含む情報が入つてこない現状の不利さに、桃矢は気付いていた。今日、その事をみんなで話し合お

うと思つていたところだ。

「ゼ豚前国王のコレクションを整理して、使えそうなのを持つてきたわ」

桃果の「豚」という発音に、ピクリと反応したエレカだったが、桃矢は気付かない事に決め込んだ。

「衛星通信設備もあったのよね。屋外アンテナは何年も前に組み上がつているから、後はセットアップするだけよ」

小気味よく繰り出される専門用語。各委員長が、尊敬の眼差しで桃果を見ていた。

「あの、桃果様？」

「何かね？ ミウラ君？」

「桃果様はコンピューターを使えるのですか？」

「いまさら何いつてんの？ 桃矢だつて手元を覗き込みながら、たつた指三本でキーボード叩けるのよ。あたしなんか片手でマウスをクリックできるわ！ しかもダブルクリックよ！」

一同、感嘆の声が上がる。記録係の女の子まで手を止めて聞き入つていた。

ゼクトール国内のパソコン普及率は、世界でも最低レベルのようだつた。

桃果はそこにつけ込んでいる。人、それを詐欺と呼ぶ。

「じゃ、とりあえずシステムを構築しましょつか？ 外部とメールアカウントを繋いでプロバイダーを作るわよ。まずはインターネット開設ね」

桃果の脳内普及率も大したことなさそうだった。ゼクトールの人たちにとつて、知らない単語の取り違えに重要性はない。

実質的な被害はなさうなので、桃矢も黙つて頷いてるだけにし

た。

「じゃ、桃矢、線を繋いで！」

「え、僕？ そして線？」

デスプレイと本体を繋ぐくらいならできるけど、通信設備とかになるとちょっとわからない。だからといって、メカ音痴の桃果に任せるのはもつといけない。桃矢のノートパソコンが火を噴いたのは、桃果が使っていたときだったからだ。

「トーヤ陛下、コンピューターに詳しいんですか？」

キラキラとした眼でミウラが桃矢の目を覗き込む。気がつくとミラを除く全委員長、赤い三連星、そして記録係の女の子、全てが尊敬の眼差しで桃矢を見つめていた。

「当然じゃないですか！ 任せてくださいよ…」

芦原桃矢・高校二年・十七才・男前である。

だが、悲しい出来事が。

繋がる穴と出っ張りを合わせながら接続していくたが、何本かコードが余る現象が発生したのだ。コードが余っているのにコードが足りない。ほとほと弱った。

すると、横から小さな手が伸びてきた。ミラだ。

みるみる繋がっていく周辺機器。電源が入り、デスプレイに画像が浮き上ると、桃果までもが声を上げた。

読み込ませるソフトを読み込ませ、決めるべき暗証番号を全て打ち込み、セットアップは完了した。

プラズマディスプレイ画面は、どこかのニュースサイトを表示し

ている。

「ふつ！ まあこんな物ね。でも、気をつけて！ 変なサイトを開くと、小さな画面がいっぱい開いて手がつけられなくなるのよ！ ケティムのサイバー攻撃は驚異よ！」

委員長達は一斉に一步下がった。

それはたぶんサイバー攻撃じゃないと思うよ、と桃矢は言いたかった。が、何で知っているのか？ 見たことあるのか？ と聞き返されると答へに詰まるので、結局何も言わなかつた。

なんとなく犯罪に荷担している氣がするのが、心苦しい桃矢であった。

「いよいよ明日ね」

夜の浜辺。王宮裏の浜辺で夕涼みをする桃矢の後ろから、桃果が声をかけてきた。

三夜連続で王宮を抜け出している桃矢。身辺警護はどうなつているのか、とても心配だ。

「国連のどつかで話し合いがもたれるんだつたつけ？ ハンスウチ
やん大丈夫かな？ そ

れ以前に、無事ニコニコークに着いたかな？」

夜空を見上げる桃矢。スコール後の冷たい風が心地よい

南の空に輝く星々に桃矢の思いは馳せる。昼間、家に今までのいきさつを電話で話した。某国際通信社の衛星通話網を使った電話だ。ケティムに盗聴されていることを前提に話さなければならなかつたので、詳しい話はできなかつた。

電話に出たのは父だつた。色々文句を言われたが、安全だと言はつていたら何とか理解してくれた。……それは嘘なんだが。父は、母にどうやつて話を伝えるか、頭を抱えながら電話を切つた。

両親との話し合いといつ、大きな山は越えた。まだまだ乗り越えなければならぬ山は沢山あるが、その一つが明日の国連での会議だつた。

「いずれにしてもエンスウに期待できない以上、ニコニコークークに着いてなかろうが、道に迷つて泣いていようが、予想される結果への影響は少ないわ」

桃果の悲観的な予想。その辺が桃矢も心配なところだが、どのみち公の場でケティムに敵うはずもない。力でごり押しされ、開戦する筋書きが変わることはなかろう。

「悩みが一つ減つただけだよ。僕はこれから考える」「なにそれ？」

桃果が変な目をする。桃矢の考えが読めなかつたのだ。

「実は、あることを悟つたんだ。同じ精神力を使う行動なんだけど、悩むだけじゃ少しも前進できないって気付いたんだ。でもね、考えれば何かが解決する。良くも悪くも。だから、僕は悩むことを放棄した。悩みそうになつたら考えることにしたんだ。僕は今日、一つ大人の階段を上つたんだ」

名案を思いついた子供のように、自慢げに胸をそらす桃矢。

桃果は大きく溜息をついた。

「桃矢。 脳天気つて単語の存在に、やつと気付いたのね」

とてもナマ優しげな桃果の笑顔、だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0753z/>

悪役上等！ 武装戦闘国家ゼクトール

2012年1月13日21時56分発行